

主は、生きておられる

Unser HERR lebt



graph magazine

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主は生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. 32 定価100円(税込み)

メッセージ

- 4 愛されている幸せ ゴットホルド・ベック

こどもへのメッセージ

- 16 神様へのたいど 松下明文

11人の証し

- 28 主の「平安」 津波隆之
34 主イエス様にゆだねることの大切さ 津波倫子
40 愛し、導き続けられるイエス様 野中美紀
47 高慢が砕かれるために与えられた試練 竹内悦子
51 心の貧しい者は幸いです 永田広喜
59 イエス様は、脱出の道を備えてくださいます 永田康子
68 主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな 小泉哲男
75 主よ、あなたの恵みはいとも深いのです 小泉貴子
81 イエス様は母をあわれんでくださいました 大須賀弘子
85 人生の戦いを主に導かれて 田盛道世
89 大いなる主のご愛に感謝 大庭俊明



愛されている幸せ

ゴットホルド・ベック

イエス・キリストのしもべであり、ヤコブの兄弟であるユダから、父なる神にあつて愛され、イエス・キリストのために守られている、召された方々へ。

どうか、あわれみと平安と愛が、あなたがたの上に、ますます豊かにされますように。愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていましたが、聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生まれました。

(ユダ 1～3)

しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によつて祈り、神の愛のうちに自分自身を保ち、永

遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。疑いを抱く人々をあわれみ、火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によつて汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。

あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもつて栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

(ユダ 20～25)

以前、西ドイツのシュトゥットガルト(私の生まれ故郷)

にある「トゥリツチュラー」という有名な陶器店に立ち寄ったことがあります。その時、店内に掲げられていたキヤッチフレーズ「自然と共に生きる幸せ」が目飛び込み、記憶に残りました。たしかに自然の美しさに触れ、その中で生きる喜び、それも一つの幸せには違いありません。けれども、主である神のみことばが私たちに提供してくれているものは、それと比較にならないほど大きな価値をもっています。そこで今回は、自然と共に生きる幸せではなく、「愛されている幸せ」という題名で、「ユダの手紙」20～23節から「緒に考えてみたいと思います。ここでの中心的なみことばは、21節「神の愛のうちに自分自身を保ち」なさい、です。

まだ信仰をもっていない人々に求められることは、悔い改めて信じる、すなわち「正直で、素直になり、主なる神の御前にへりくだる」ことです。ところが信仰をもつ人々に求められることは、それだけではありません。第一に築き上げること、つまり、霊的な成長です。第二には、

愛されている幸せ

祈つて主と結びつくことです。第三に待ち望むこと。再臨に対する備えです。第四に、人を救うための燃える愛です。第五には、罪を憎む、つまり、妥協のない態度です。ここで、私たちが主からの警告を与えられていることは間違ひありません。私たち信仰者は何をなすべきでしょうか。主は私たちに何を期待しておられるのでしょうか。

ユダは3節で「ともに受けている救い」と言っています。罪の赦しを確信し、主のものとなつたすべての人は、全身全霊をもつて主イエス様を愛するべきです。けれども「ユダの手紙」の中で教えられていることは、主に對する「私たちの愛」が中心なのではなく、私たちに對する「主の愛」が中心だということです。21節の「神の愛のうちに自分自身を保ち」なさい、というみことばは、主の愛のうちに私たちが置かれているということ、つまり、私たちがいつも主の愛に守られていることを意味しています。主に愛されていることは最大の幸せです。けれど

も、自己中心や自己実現によって盲目にならないように、また不従順や、恐れや心配によって罪を犯さないように注意しなければなりません。主イエス様との交わりを妨げるすべてのものを避けましょう。「主イエス様が私たちを愛しておられる」ということをいつも心に留めながら生活しなければなりません。

愛されている幸せとは、光の中に生きる幸せをも意味しています。しかし、本当にいつも光の中にいることは可能でしょうか。絶えず「主が私たちを愛しておられる」ことを意識しながら生きることができのでしょうか。聖書ははつきりとそれは可能だと答えています。

引用した聖句の中には「守られている」ということが二度、出てきます。まず1節では、あらゆる信者が父なる神によって愛されていることだけではなく、主イエス様によって「守られている」ことが記されています。そして、24節でもう一度、救い主イエス様が私たちを「守る」方であること、あらゆる信者をつまづかないように守ることができ、傷のないものとして、大きな喜びをもって栄

光の御前に立たせることができると語られています。はじめの1節でも終わりの24節でも、私たちが主に守られていることが教えられているのです。私たちは主イエス様の内に守られており、主イエス様ご自身が王なる守り手だからこそ、「神の愛のうちに、自分自身を保ち」なさい、と言われているのです。

「私たちがどれほど愛されているか、一瞬たりとも忘れてはならない」というのが主のご命令です。しかし、これはどのようにすれば実践できるのでしょうか。20、23節のみことばを通して、はじめに挙げた五つの前提条件を順にみて行きましょう。

1 築きあげなさい

ユダの手紙20節の「しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持つっている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ」なさい、というみことばは、言いかえれば、霊的成長という目標を持って生きていきなさい、ということです。霊的な成熟が主から要求されているのです。

私たちはなぜ、どのようにして、自分自身を築き上

げるべきでしょうか。その答えはペテロ第二の手紙3章18節にあります。「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン」。聖書は信仰に導かれた者に対して、繰り返し、成長すべきことを要求しています。霊的に未熟な状態にとどまっていではなりません。霊的に前進しましょう。私たちが主イエス様をさらによりよく知ることができそうです。

救われて主なる神の家族に属することは素晴らしいことです。ところが、信者が霊的に成長せず、未熟な状態にとどまるならば、それは悲劇的なことです。こういう霊的な未発達状態は主の働きに対する大きな妨げになります。「自分の持つっている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ」なさいと、みことばは時間をかけて、築き上げることの大切さを指摘しています。ちょうど、

愛されている幸せ

煉瓦の建物を建てる場合、一つ一つと積み上げていくことによって、最終的に、建物全体が完成するのと同じように、私たちがまた主イエス様を日々よりよく知り、生涯を通して、主に似た者となるよう成長すべきです。

多くの信者はたいいてい、一つの基礎を持っています。基礎は大切なものですが、基礎がどれほどしっかりしていても、基礎だけでは生きていきません。多くの人は一階だけ建てて、それ以上先に進もうとしません。その上に屋根がなければ、雨風から守れないのは当然です。そのような中途半端な建築はみな物笑いになり、中途半端なキリスト者もまた主なる神の御名が崇められるところになりえません。

例えばコリントには、最初の状態で成長が停まってしまった信者たちがいました。パウロは、その人々に心の痛みをもって手紙を書きました。

兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に

属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。

(1コリント 3・1)

私たちはどうでしょうか。まだ赤ん坊なのでしょう。なかなか成長しない、霊的に未発達なままなのでしょうか。あるいは、霊的に大人になっているのでしょうか。「自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ」なさいと、主のみことは語っています。主のみことばによって、私たちは自分自身を築き上げて前進するのです。主がみことばを通して私たちに語らいかけ、私たちがみことばに従うときに、霊的な成長が実現します。全生涯を通して、主のみことが私たちの考え、私たちの行為の土台となっているなら、私たちは確実に成長し主の似姿へと変えられていきます。

友情、結婚生活、仕事、それらすべては主のみことばの上に築き上げられるべきものです。そうすれば、私たちは主イエス様にあつて、また主の強い力によって堅く立

つことができます。そして、自分が主に愛されている幸せを必ず経験します。霊的な成長という目標をもって生きましょう。それこそ、私たちの切なる願いでなければなりません。

もし私たちが主イエス様を信じる者として、もう一度初めから人生をやり直すことができるなら、すべてのことをこれまでと違ったやり方で行なうべきではないでしょうか。そのとき私たちはみな、主のみことばと主の御約束に二層頼る者となるでしょう。

毎朝、「静かな時」をもつこと、心の飢え渇きをもつて主のみことばを読み、祈ることは、霊的な成長にとつてどうしても必要です。このような「静かな時」をもたず、成行きに任せる人は正しい方向性を見失います。どうか、毎朝、主のみことばを読み、みことばを通して主に語っていただく時をもつてはありませんか。

愛されている幸せは、朝の静かな時と関連しています。主によって愛されたいと思うなら、主のみことばが与えてくださる豊かな恵みを受け取る必要があります。

2 祈りなさい

ユダの手紙の20節に「聖霊によって祈り」なさい、とあります。祈るとは、意識的に主により頼んで生きることです。ここでは、御座についておられるお方と、絶えず結びついていることが求められています。

祈りには二種類あります。一つは、自分の願望や関心事を言い表す祈りであり、もう一つは、聖霊の願望と関心事とを内容とする真の祈りです。「あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。……義人の祈りは働くと、大きな力があります」(ヤコブ 5・16)というみことばにあるように、御霊による真の祈りは奇跡をもたらします。真の祈りは、聖霊によって与えられる祈りです。そのような祈りは、主なる神の御座から来て、再び神の御座に戻ります。ですから「どんなときにも御霊によって祈りなさい」(エペソ 6・18)と主なる神は命令なさるのです。聖霊によって祈る信者は主と結びついており、意識的に主により頼もうと

します。どのような犠牲を払ってでも、引き上げられた主イエス様との日々の絶え間ない接触が私たちの人生の特徴とならなければなりません。キリスト者にとつて、これほど価値のある大切なものは他にはないのですから。

光の中を歩む人は、主との交わりを喜ぶことができ、主に愛されている幸せを体験します。

祈りを通して、絶えず主にだけより頼みましょう。そうすれば、どこに居ようとも、どのような状態にあつても、私たちは常に主のもとに行くことができます。主イエス様の御許で重荷をおろすことができます。主イエス様が私たちのために心配し、配慮してくださるからです。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深い

愛されている幸せ

うめきによって、私たちのためにとりなしてください。
ます。

人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

(ローマ 8・26、27)

祈りを通して主により頼むとは、聖霊の働きによることであり、大切なのは主の働きです。主の働きはいつも信者たちの祈りに対する応えですから、私たち信仰者が要求されているのは、「聖霊による祈り」です。主は、聖霊による祈りに応えて働いてくださいます。主の前に立ち続け、主に期待することほどに大切なことはありません。聖霊によって祈り、意識的に主イエス様により頼もうとする態度は、主に応えていただける祝福と主に愛されている幸せを経験する鍵なのです。

わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

(ヨハネ 14・3)

主イエス様が弟子たちの前で天に上られた時、見送っていた彼らに天使が言いました。

ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。

(使徒 1・11)

この他にも新約聖書のいろいろな手紙の中で、主の再臨が数多く語られていることを私たちは知っています。

「主イエス様は再び来られる！」ということは極めて確

愛されている幸せ

3 待ち望みなさい

私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。
(ユダ 21)

みことばは、主の再臨に対して心の備えをするよう要求しています。ところが、「主の再臨が近い！」と喜んで生き生きとした信仰生活を送っている信者がとても少ないことに、しばしば驚かされます。「主はきょう来られるかもしれない、きょうがこの地上での私たちの最後の日になるかもしれない」という思いで今朝起きた人は、何人いるでしょうか。もちろん、ほんとうに生まれ変わった人は、誰も主の再臨を疑ってはいません。それが旧約聖書と新約聖書にはつきりと預言されているからです。この小さな「ユダの手紙」でも主の再臨が何度も言及されており、この手紙全体が主の再臨を待ち望む気持ちで書かれています。何より確かなことは、私たちの主ご自身が、はつきりと再臨を約束なさっています。

実なことです。しかし問題は、私たちが主の再臨を待ち望みつつ生活しているかどうかです。ただ単に、再臨を信じるだけではなく、日々主の再臨を待ち望みつつ生きる事が大切なのです。

例えば私たちは、二―三日、特別な泊り客が自分の家へ来るとしたら、念入りに部屋を掃除したり、買い物に行ったりして、準備することでしょう。それなのに私たちは、大宇宙を造られ、尊い代価を払って私たちを贖ってくださった主イエス様を、どんな思いで待ち望んでいるのでしょうか。もしも、主が明日いらっしゃるということが分かったら、私たちは今、何をしていますでしょうか。

キリストに対するこの望みをいなく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

(1ヨハネ 3・3)

主の再臨を待ち望みながら生活するなら、私たちは

もつと注意深くなり、光の中を歩むことでしよう。

しかし、「光のうちを歩む人生」、「日々、聖められる人生」といっても、結局は自己中心で、自分のことだけを考える人生ではないか、と多くの人は尋ねるかもしれません。その答えは、ユダの手紙の22〜23節の中に見出されます。「疑いを抱く人々をあわれみ、火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ」なさい。もつと簡単に表現すると「救い出しなさい」ということです。あるいは、「失われている魂の救いのために生きなさい」ということです。

4 救い出しなさい

主の愛の対象である失われた魂の救いのために、燃えている愛が要求されています。自分が主に愛されていると自覚して生きる時、そしてまた光の中を歩むとき、他の人々もまた自分と同じように主の愛を経験し、闇から光へと移され、あらゆる束縛から解放されるようになることが私たちの関心事となります。

「救い出しなさい!」、失われている魂の救いのために生きなさい、と主は命令しておられます。そのためには次の三つのことが必要です。第一は、内面的に心を動かされること。第二は、霊的な識別能力。第三は、大いなる緊急性、切迫性を感じることです。

まず、私たちが主のために魂を獲得したいと思うならば、内面的に心を動かされることが必要です。私たちの模範となるイエス様は「群衆を見て、羊飼いのない羊のようになり果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた」(マタイ 9・36)のです。私たちの周りに、心の支えもなく、生きがいのある人生の目標もなく、平和とまことの喜びのない人々を見ると、そしてまた羊飼いのない羊のように弱り果て倒れている人々を見ると、私たちもまた心を動かされるでしょうか。それとも、強盗に襲われ道に倒れている人を横目で見ながら無視して通った祭司やレビ人(ルカ 10・25〜37)のように、彼らに対して無関心に通り過ぎて行くのでしょうか。

苦しんでいる人々は、私たちをあらゆる安穩さから目

覚めさせざるを得ないはず。襲われ、倒され、略奪されても自分の力では何もできない人々を、身をかがめて、助ける備えのあるサマリア人のような人々が求められています。現代もまた、倒産したり職を失ったりしてどうしてよいか途方に暮れている人や、情欲のとりこになつて泥沼に入り込み絶望的な状態に陥っている人が少なくありません。そのような人々の永遠の救いのために、祈り続けることは罪です。

さらに必要なことは「霊的な識別能力」です。私たちは何をどのようにしたらよいかを知るために、主に導いてもらわなければなりません。敏感な判断力と、識別能力がどうしても必要です。私たちはひとりひとり、どのように語るべきであるかを知るために、主の霊に導いていただかなければならないのです。

ユダの手紙の22〜23節によれば、二つの区別がなされなければなりません。ある人々は、罪の債務が支払われなければならないことを知る必要があります。主は罪

を罰する方であること、それゆえに身代わりとなり、弁護してくださる方、すなわち主イエス様なしに生ける真の神の御手に陥ることが、いかに恐ろしいことであるのか知らなければなりません。悔い改めのない信仰は決して十分ではありません。また別の人々は、主の大いなる愛、主の測り知れない憐みについて知らなければなりません。私たちは主の霊の導きによってのみ、人を主に導くことができるのです。

もし私たちが、失われた魂を主に導きたいと思うなら、今までみてきたように、第一に深く心を動かされること、第二に正しい霊的識別能力をもつ必要があります。第三に、大いなる緊急性、切迫性をもって生きなければなりません。主のしもべであるユダは、人々を「火の中からつかみ出して救い」なさいと言っています。失われた魂を獲得することは、もつとも緊急を要する使命です。人々は地獄に行かないように救われるべきです。問題は世界観や宗教ではなく、永遠の救いか、それとも永

遠の滅びかです。

私たちが「主に愛されている幸せ」を毎日経験しているならば、まだ救われていない大勢の人々に対して、無関心でいることはできません。主によつて愛されたパウロは次のように証しました。

私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかつたら、私はわざわざいに会います。

（私は）すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。

（1コリント 9・16、22）

ユダは「神の愛のうちに自分自身を保ち」なさい、つまり、主に愛されている幸せを大いに喜び味わいなさい、と当時の兄弟姉妹を励ましたように、今の私たちをも励ましてくれます。

5 忌み嫌いなさい

肉によつて汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。
（ユダ 23）

妥協のない態度で生活するように私たちは要求されています。聖なる憎しみが必要です。あらゆる罪深さ、不純、あいまいな行動は斥けられなければなりません。もし、あなたがコートを借り着していて、それが恐ろしい伝染病患者の物だったということを知らされたら、どうするでしょうか。あなたは驚いて急いでコートを脱ぎ捨ててしまう。もし、私たちが罪に対しても、同じ態度をとることができれば幸いです。ちやうどヨセフがしたように驚いて逃げ出すべきです。

ヨセフは「どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができましょうか」（創世記 39・9）と言つて誘惑を拒みました。

私たちが見たり、聞いたり、手にしたりするものは

たくさんありますが、それらには、私たちを主から引き離そうとするものが少なくありません。そういうものには、はつきりとした、妥協しない態度をとることが大切です。そのような態度をとろうとしない多くの信者は、愛されている信仰者の幸せについて、何も知りません。パウロは、信者たちに対して真剣に呼びかけています。

愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。
（2コリント 7・1）

私たちは自発的に、断固としてこの態度をとるとき、光の中を歩み、主の完全な愛を経験することができのです。

最後に、外国のある大富豪が買ったすばらしい家をご愛されている幸せ

紹介しましょう。それは、珍しい造りで家全体が回転するので、持ち主は二日中部屋の中に太陽光線を入れることができます。この家のように、絶えず光のうちを歩むことは、どうすればできるのでしょうか。そしてまた、「主イエス様に愛されている幸せ」をますます経験していくためには、どうすればよいのでしょうか。私たちはそれに対して、もうすでに五つの答えを出して考えてきました。築き上げ、祈り、待ち望み、救い出し、忌み嫌うことです。つまり、霊的に成長する目標をもって、意識的に主のみにより頼み、主の再臨を喜び待ち望みながら生きること、そして、失われている魂の救いのため、妥協しない態度で生きることです。

神様へのたいど

まつしたあきふみ
松下 明文

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。

わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」

と言う年月が近づく前に。

(伝道者 12・1)

はじめにひとつ、たとえばなしをしましょう。

みなさんが粘土で人形を作ることになりました。

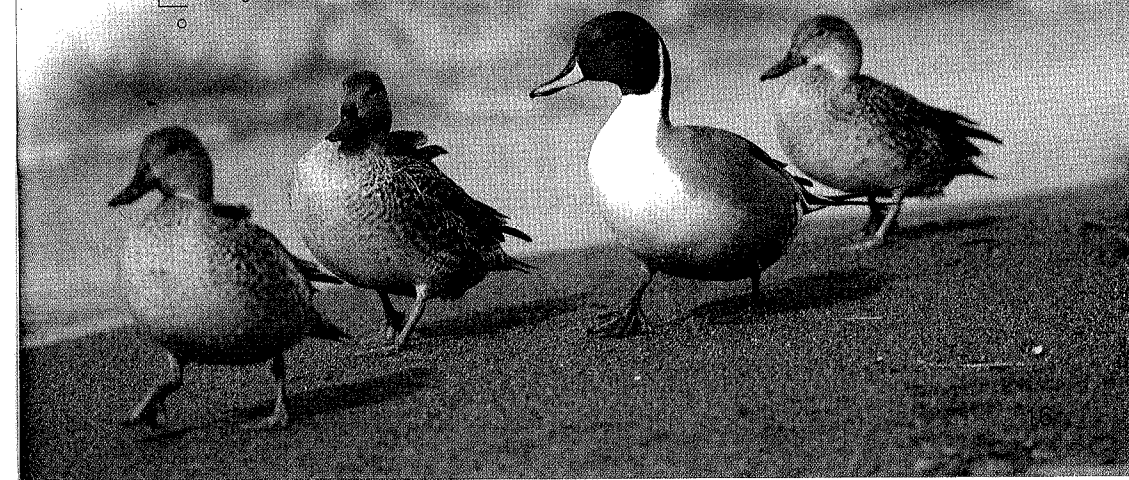
男の子は、どうしたらかつこよくなるのか、真剣にとりくみました。

女の子は、かわいいものを作ろうと、「生けんめいでした。

みんな、心をこめて、大切に、人形を作りあげたのです。

ところがなんと、その人形が、あなたに向かつてしゃべりだしたのです。

「あなたは どうして、わたしをこんなにぶかつこうに作ったのですか！」。



みなさんがせつかく作った人形が、もんくを言いはじめたのです。もう、がっかりするやら、腹がたつやら……。

まあ、こんなことはありえないことですが、それはさておき、作った人が作られたものからもんくを言われるとは、なんとおもしろくないことでしょう。

作った人と、作られたものと、どちらがえらいでしょう。もちろん、作った人のほうがえらいのです。作った人がいたから、作られたものができたのです。あたりまえですね。

まごころこめて作ったみなさんに、もんくを言う人形なんて、本当に「たいどがわるい」ですね。でも、この人形のたいどが、じつは、わたしたちの、神様にたいするたいどなのです。

しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。

(ローマ 9・20)

神様へのたいど

みなさんの神様へのたいどは、どうですか。いやなことかもしれませんが、大切なことなので、わたしたち「にんげん」が、ふだん、神様にたいして、どんなたいどなのか、見てみましょう。

1 無視するたいど

神様は、せかいをお造りになり、わたしたちを造られたおかたです。さいしよのみことばに、「あなたの創造者」、とありますね。あなたを造られたおかた、という意味です。神様は何もないところから、このせかいをお造りになりました。また、わたしたちを生かし、いつも、見ておられるおかたです。「神様なんて、知るもんか」、そんなふうに神様を無視するのは、たいへんおそろしいたいどなのです。神様を無視してせなかをむけること、これを罪と言います。

愚か者は心の中で、「神はいない。」と言っている。

(詩篇 14・1)

2 もんくを言うたいど

神様はわたしたちのことを、しんけんに考えておられます。あなたの家族、あなたのお友だち、あなたのこれからのこと。あなたにとって、なにがいちばん良いことなのか、神様はよく知っております。

今のあなたにとって、いちばん良いものを与えてくださいます。それなのに、さつきの人形のようにもんくを言うのは、たいへん失礼なことです。

永遠の愛をもって、わたし(神様)はあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。

(エレミヤ 31・3)

神様へのたいど

3 神様かみさまに向かつてむ、怒るおこたいど

じぶんの思おもいどおりにならないと、すぐ怒おこるひとがいます。じぶんがせかいの中心ちゅうしんなのですね。でも、あなたは、せかいの中心ちゅうしんではありません。せかいの中心ちゅうしんはただおひとりだけです。そのかは、主しゅなる神様かみさまです。すべてを造つくられたおかたです。

わたしが主しゅである。ほかにはいない。

(イザヤ 45・18)

ご自身じしん(イエス様さま)がすべてのことにおいて、第一だいいちのものとなられたのです。

(コロサイ 1・18)

4 へりくだった たいど

いままでの1から3は、「悪いわるたいど」です。神様かみさまよりも、じぶんのほうがえらい、と思うおもたいどです。これを「高ぶりたか」とか「高慢こうまん」とかいいます。

高ぶりたかのはんたいは、「へりくだり」です。じぶんより、神様かみさまのほうがえらい、と思うおも心こころです。わたしはたいどが悪いわる、と思おもつたら、すなおに「ごめんなさい」と言いえるでしょうか。それが「へりくだったたいど」です。主なる神様かみさまは、いろいろなこと(とくに、かなしいこと、くるしいこと)をとおして、わたしたちがへりくだった心こころを持つもつように、してくださいます。だんだんと、心こころの中で、主しゅが大きくなり、わたしが小さくなるのです。

わたしは、あなたの神かみ、主しゅである。わたしは、あなたに益えきになることを教おしえ、あなたの歩あゆむべき道みちにあなたを導みちびく。

(イザヤ 48・17)

神様へのたいど

さあみなさん、いかがですか。

みなさんの心は、神様に対して、どのようなたいどですか。

さらにもうひとつ、見てみましょう。

5 わたしたちは、じぶんのたいどが悪いことに、 なかなか気がつかない

そうなのです。このことは、なかなか気がつかないどころか、「わたしはもんだいのない、良いにんげんです」なんて、まったく反対のことを思っている人が多いのです。……そう言うわたしもそうでした。

ではどうしたら、じぶんはたいどが悪い、と分かるのでしょうか。

では、もう少しふみこんで、わたしたちの、大人へのたいどを考えてみましょう。特に、親へのたいどを考えてみましょう。

お父さん・お母さんの言うことを聞いていますか。「はい」とへんじをしていますか。言われたことは、すぐやっていますか。

また、ちゃんとあいさつができますか。

何かもらったら、「ありがとう」を言っていますか。

しかられたら、すなおに「ごめんなさい」と言えますか。

お父さん・お母さんはすごい、と思えますか。

お父さん・お母さんが好きですか。

お父さん・お母さんを「こわい」と思えますか。

これらのことは、とても大切です。なぜかと言うと、親へのたいどは、そのまま、神様へのたいど、だからです。あなたを生み、育ててくれた人へのたいどは、あなたを造られた神様へのたいどと同じです。もし、あなたの親へのたいどが良くないなら、神様へのたいども良くありません。いかがでしょう。とくに、最後のところは大切です。あなたは、お父さん・お母さんが好きですか。お父さん・お母さんがこわいですか。好き、という思いと、こわい、という思い、両方がないといけません。

神様へのたいど

子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。

(「コサイ 3・20)

6 神様へのたいどで、人生がきまる

神様へのたいどが悪いことに気がいたら、すぐに、神様に「ごめんなさい」とあやまつて下さい。あやまつたひとは、その場でゆるされます。ゆるされたひとは、永遠のいのちがあたえられるのです。はんたいに、たいどが悪いことに気がついても、死ぬまで「ごめんなさい」を言わなかったひとは、ゆるされません。死んだあと、おそろしいさばきと、永遠のほろびが待っているのです。

ではなぜ、ごめんなさい、と言っただけで、ゆるされるのでしょうか。なぜそんなにかんたんに、永遠のいのちがもらえるのでしょうか。天と地をおつくりになった神様のひとり子、イエス様が、十字架で、「罪のばつ」を、わたしたちのかわりに受けてくださったからです。

7 イエス様のしてくださったこと

わたしの知り合いの、小さな女の子のおはなしです。あるとき女の子は、家の玄関先で、小石を投げてあそんでいました。投げてしばらくすると、どこかで、カーン、という音がします。その音がおもしろかったのでしょうか、女の子はなんとも小石を投げつけました。

ところが、女の子の家があつたのは、マンションの六階でした。カーンという音、それは、下の駐車場の車に、小石が当たる音だったのです！ 両親が気がついたのは、もうすでに、何台かの車に、小石のあとがいくつもついてしまったあとでした…(みなさんはぜったいに、まねしないでくださいね) 女の子の両親は、すぐに、車のもちぬしにあやまりました。そして、あやまつただけでなく、お金をはらつて、その車をもとどおりにしました。もちろん女の子もあやまりましたが、親が、せきにんをとつて、お金をはらつたのです。こどもの罪のために、親があやまつて、お金(代価)といひます)をはらつたのです。じつさい、女の子には、はらうお金などなかったのです。

神様がなさつたのも、これとおなじです。わたしたちのした罪は、大きすぎて、せきにんがとれず、神様へのたいど

ないのです。神様へのたいどが悪いということは、それほど、たいへんなことなのです。

しかし、神様は、イエス様を十字架につけてくださり、とおとい代価をはらわれました。ですから、わたしたちは「ごめんなさい」と言うだけで、へりくだるだけで、ゆるされるのです。なんとありがたいことでしょう！

しかしみなさん。イエス様は死んだだけでなく、三日目によみがえられました。イエス様はよみがえりによつて、死をほろぼされたのです。イエス様はよみがえつて、永遠のいのちを、はつきりとあらわされました。あなたも、神様に「ごめんなさい」と言ったら、罪のゆるしだけでなく、永遠のいのちも、いただけるのです。そして、「わたしよりも、イエス様のほうがえらい」と、「へりくだったたいど」をとるなら、永遠のいのちが、だんだんと、はつきりしてくるのです。

神は、実に、そのひとり子（イエス様）をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ 3・16）

さて、みなさんの、神様へのたいどは、どうですか。



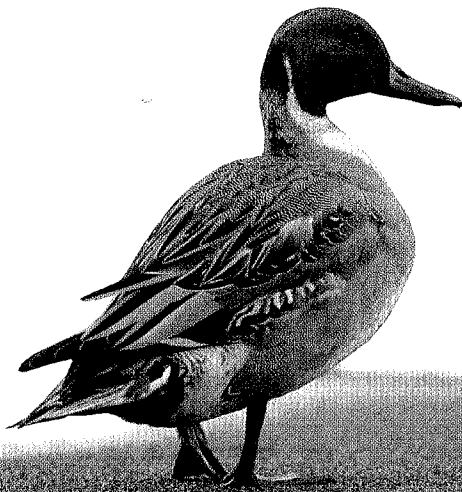
松下明文（まつした あきふみ）

長野市在住。愛知県新城市出身。鳳来中、新城東高卒。

大丸合成薬品（株）勤務

妻・たまき、長男・直人（なおと）、次男・誠治（せいじ）、

三男・雄基（ゆうき）、長女・ひとみ



主の「平安」

津波 隆之



妻の倫子さんと

私は一九七五年三月十九日に生まれました。当時、父親は十七歳、母親は十六歳で、育児ができなかったのかもしれませんが、物心がついたときから、祖父母に育てられた記憶しかありません。父と母は私が三歳のときに離婚したそうです。それから二年後、私が五歳のときに父は再婚しましたが、一緒に住むことはありませんでした。

祖父母の愛はすぐ感じていました。でも本当は、父親と住みたいという思いでいっぱいでした。しかし、祖父母と父の気持ちを思うと、誰にも本心を打ち明けることはできませんでした。

どうか、主があなたがたの心を導いて、神の愛とキリストの忍耐とを持たせてくださいますように。

(2テサロニケ 3・5)

父親と新しい母親に、三人の子供が生まれました。

僕の妹、弟です。幸せそうな家族に見えました。でも私が一緒に住むことはありませんでした。「同じ家族のはずなのに……」と心の中で思っていました。

それから私の心の何かが変わった気がします。この人は私を必要としているかいなか、と周囲の人を判断し、十七歳のときに自分の居場所がないと感じて家を飛び出し、二年間さんだ生活を送りました。

十九歳のときに祖父が倒れ、家に戻りました。祖父の世話はずべて私がしましたが、祖父母の愛を感じていたので苦にはなりませんでしたが、でも父親に対しては憎しみがなく、十年以上も言葉を交わすことを避けていました。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

(詩篇 37・23、24)

その後、祖父の体調は回復し、一緒に事業を立ち上げ、祖父母との三人の生活が始まりました。幼いころ一緒に生活していたことを思い出し、楽しくもあり苦しくもありました。

祖父母は先祖崇拜をしていて、幼いころからそれが当たり前の生活でしたが、疑問に思うこともありました。お金で祈りをささげることもその一つです。でも、愛情豊かに育ててくれた祖父母に疑問を言うことはできませんでした。

その後、二十六歳のときに倫子姉妹と出会い、倫子姉妹を通してイエス様のことを知るようになりました。出会った当時は「信仰は自由だから」と、イエス様に近づくことを避けていましたが、付き合いを重ね、義父母の喜屋武兄妹を通してイエス様のことを深く考えるようになり、集会にも集い始めました。集会の最初の印象は、イエス様に愛されている兄弟姉妹の優しさでした。そして兄弟姉妹の愛情に心動かされ、祈

りと賛美の中にいることに喜びを感じ、イエス様とつとつながりたいと願うようになりました。

私が呼んだその日に、あなたは私に答え、私のたましいに力を与えて強くされました。

(詩篇 138・3)

幼いころから、私は愛情が欲しくて、良い子のふりをしていました。そんな私を集会の姉妹は、無条件で受け入れ、愛情を持って接してくれました。姉妹との交わりを通してイエス様の深い愛情を感じるようになり、気づいたら私の心の中心にイエス様がおられました。

倫子姉妹とお付き合いをして二年が経ち、結婚をすることになりました。先祖崇拜の祖父母には「私はイエス様に愛されている」とは言えず、思い煩っていました。しかし、イエス様を中心に始まった結婚生活は、

すごく幸せに感じました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

(エペソ 2・8)

でも、私には分からない言葉がありました。それは、イエス様が与えてくださるという「主の平安」です。「主の平安」って、何だろう？何も考えないこと？悩みがないこと？普通の平安とどこが違うのかと首をかしげたのです。言葉の本当の意味がよく分からず、疑問に思いながらもイエス様に愛されている実感はありました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人

のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

(ピリピ 4・6～7)

私が二十九歳のときに祖父が天に召されました。今考えると信仰がなければ、乗り越えきれない出来事だったかもしれません。しかし、祖父にイエス様のことを伝えられなかったことは、私の心に深く残りました。そのときから、祖母にはイエス様の愛を知ってもらいたいと真剣に祈るようになりました。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。

(エレミヤ 33・3)

私が三十三歳のときに倫子姉妹に病気が与えられました。

あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。

(1コリント 10・13)

頭にみことばが浮かんでも、すごく不安や苦しみが襲ってきて、ただ祈ることしかできない自分が悲しくなりました。

私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。

(詩篇 4・1)

手術直前、喜屋武兄弟が祈ってくださいました。私は、倫子姉妹は痛みと苦しみの中にいて祈りの言葉は聞こえないと思っていました。でも、最後に姉妹が「アーメン」と強い言葉で言ったとき、私は自分の愚かさに気

づきました。私たちはイエス様に愛されているのに、一人で悩み苦しみ、いったい何をしているんだろう。イエス様にすべてをお任せしよう。そう思った瞬間、心の中で今まで経験のしたことのない思いが湧きでてきました。手術も成功し元気で退院することができました。まだ、治療は続いています、すべてがイエス様の導きであり、本当に感謝です。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

(申命記 31・8)

自分が感じたイエス様の深い愛を、祖母にも感じてもらいたいという思いがますます強くなっていききました。私のその祈りを、イエス様はご存じだったのでしょう。祖母は、クリスマス祝会や日曜礼拝に参加するよ

うになり、私が三十七歳のころには毎週礼拝に参加するようにになりました。集会では祖母の同級生である義母の信子姉妹がいつも側に座って、一緒に聖書を聞いてくださいました。

その祖母も天に召されました。イエス様の愛を感じながら、召されていったと確信しています。心からイエス様に感謝しました。

しかし、確かに、神は聞き入れ、私の祈りの声を心に留められた。ほむべきかな。神。神は、私の祈りを退けず、御恵みを私から取り去られなかった。

(詩篇 66・19、20)

祖母が召されたことをきっかけに、父と話をする機会がたくさん与えられました。不思議と、父親のことを憎いと思う気持ちはいつのまにか消えていました。祖母の死を通して、父も何か変わったような気がしま

す。今は、これからでも親子の関係を深めていきたい、イエス様の愛を知ってもらいたいと祈っています。

祖母に育てられたこと。倫子姉妹との出会い。祖母との別れ。父親への思い。すべてがイエス様から与えられたものであり、いろいろな悩み苦しみの中にあっても、神様の愛で満たされている実感を持つことができる私はとても幸せです。

かつて分からなかった「平安」という言葉の意味。それはイエス様の愛に満たされることであり、心に喜びと希望があふれ出てくるものだと感じるようになりました。うまく表現することはできませんが、神様は確かに生きていて、私たちにいつでも平安を与えてくださる、と確信しています。

あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。

(詩篇 4・7、8)

津波隆之

美里工業高等学校 設備科卒
医療法人沖繩徳洲会 徳洲苑かふうで介護福祉士として勤務

主イエス様にゆだねることの 大切さ

津波 倫子



後列左端がお母さまの信子さん、右から2人目がお父さまの昌信さん、倫子さんを囲んで

今回、証しを書かせていただくことになり、自分とイエス様とのつながりを、あらためてゆつくりと考えることができました。つたない証しではありますが、この機会が与えられて感謝しています。

目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。
(コロサイ 4・2)

熱心なクリスチャンだった祖母は、私が幼いころから、聖書のみことばを読み聞かせ、私たち家族のために祈ってくれていました。賛美歌が流れ、歌うことにも祈ることにも抵抗はありませんでしたが、教会に集うことはなく、ただ、その日常があたりまえのように過していました。中学二年生の時、五十一歳だった父が脳内出血で倒れ、右半身にマヒが残りました。車イスに座り、ぼう然と外を眺めている父の姿に、私は悲しみと不安にかられました。その中で、楽天家で明るい母は、

私たちの支えでした。父の病院に泊まり、朝は家に帰って私たちのご飯を用意し、仕事に出かけ、また病院へ：：という日々を続けながら、悲しい顔は決して見せず、いつも明るく振る舞ってくれました。

父はいくつかの病院に通い、「病気が治る」という新興宗教にも足を運びました。「何でもいい、心から信じられるものがほしい」と探し求める父を見て、私は父がそれで心が満たされるならいいと思っています。家族もきつと同じ思いだったと思います。

あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。(エレミヤ 29・12～13)

そんな父が集会に導かれ、今までとはまったく別人のように変えられました。それまで病気を治すことだ

けを考え必死に努力してきましたが、集会に集うことをとても楽しみにし、食事の前に祈り、聖書を読んでいたようなのです。

心から信じられるもの、それは「主イエス様」でした。やつとほんとうの神様にたどり着いた父の顔は、平安の喜びに満たされていました。そして私たち家族も、集会に集うようになりました。一瞬にして父の気持ちを変えてくださったイエス様のことを知りたいという思いもありましたが、一番の理由は「父が喜ぶから：：」という気持ちからでした。

しかし、集会に集い、聖書を読み、賛美をし、祈る中で、祖母が祈ってくれていたころの穏やかな気持ちを思い出し、私にも喜びがあふれるようになりました。それと同時に、父の病気への不安は消え、死に対する恐怖が天国の確信へと変わり、父だけではなく、私もイエス様の守りの中にあり、同じように愛されているという確信が持てるようになりました。

恐れなくて、ただ信じていなさい。

(マルコ 5・36)

しばらくして、私は姉と一緒に奏樂の奉仕をするところになりました。幼いころピアノを習っていましたが、すっかりとした基礎はできておらず、姉に助けてもらいながら何とか弾いていました。それが、姉の出産を機に、今度は一人で奏樂をすることになりました。私が間違ったらみなさんに迷惑をかける・・・と、緊張と不安から、ピアノを弾くことが苦痛になり、まったく喜びがなくなっていました。

吉祥寺集会で奏樂のご奉仕をされていらつしやる松見姉妹とお会いした時に、私は、「奏樂をする時に気をつけることはなんですか？」とたずねました。すると姉妹は「祈りながら心の中で一緒に賛美してる？それがあれば何も必要ないんじゃないかしら」と笑顔でおっしゃいました。

投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。

(詩篇 51・10、12)

隆之さんと知り合ったのもちょうどそのころでした。「ちょっと怖い感じの人だな」というのが最初の印象でしたが、会うたびに、とても素直で優しい人だと分かりました。不思議と私は、自然にイエス様の話をしていくことに気づき、しだいに、この人となら、同じ信仰のもとに歩むことができるのではないかと確信が持てるようになりました。また、話をしているうちに、隆之さんの祖母と私の母が高校の同級生だったことが分かり、二気に距離が近くなり、不思議な出会いを主に感謝しました。

あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。すべてのことを、つばやかず、疑わずに行ないなさい。

(ペリピ 2・13、14)

私は、奏樂の奉仕をするために集会に集い、ただピアノを間違えずに弾くことだけを考え、まったく祈っていなかったことに気づかされました。自分の努力と力に頼り、イエス様にゆだねることを忘れていた自分を恥ずかしく思いました。「父が喜ぶから」と集いはじめ、自分と神様との関係を考えなかった私・・・その時、心から「イエス様、ごめんなさい」と祈っていました。それから不思議と肩の力が抜け、本当に喜びを持つて集会に集い、奏樂をすることができるようになりました。

神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から、

け入れたのですから、彼にあつて歩みなさい。キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。

(コロサイ 2・6、7)

結婚して三年目に入ったころ、私は体調を崩し、激しい頭痛に悩まされるようになりました。一旦症状が治ると、頭にたんこぶのようなものが浮き出てくるのに気づき、病院でたくさんの検査を受けました。とても珍しい症状のようで、原因が分かるまでに時間がかかりましたが、頭痛が起きることに頭の表面の血管から出血しているのではないかとということが分かり、手術を受けることになりました。

これまで大きい病気をしたことがなかった私にとって、治療を受けることはとても不安でしたが、家族や集会の兄姉の祈りに支えられ、「この病気もイエス様が許されたことで、必ず意味のあることだから」とい

う平安な気持ちで手術にのぞむことができました。

もし私たちが苦しみ会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです。

(2コリント 1・6)

術後、右顔面にマヒが残り、しばらく治療は続きましたが頭痛は落ち着いていきました。しかし半年ほどたつたころ、マヒは良くなりましたが、また激しい頭痛に襲われるようになりました。他の場所に原因があるのでは……と主治医の先生もいろいろ調べてくださり、いくつかの薬も服用してみましたが、良くなりえず、いつ起きるか分からない頭痛におびえるようになりました。しだいに平安がなくなっていきました。

そんな時、沖縄キャンプでベック兄にお会いしました。体調を崩している私のことを気遣ってください、「とてもいい薬があるんだけど、知りたいかい?」とおっしゃいました。私はすぐに「ぜひ教えてください!」とお願いました。するとベック兄は「ユダネルという良い薬があつてね、何にでもよく効くんだよ」とおっしゃいました。私は思わず笑顔になっていました。心の中の重荷がすつと消え、私は平安な気持ちに包まれていました。一番大切なのは何なのか……。主イエス様にゆだねることを忘れて自分と何かしようともがいていたのをイエス様は私に思い出させてくださいました。

したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。(ローマ 9・16)

私たち夫婦には、まだ子どもが授かっていません。二人とも子どもが大好きで、子どものいる生活は私たち

そんな時、いつものように症状が出て横になっていると、隆之兄が横に座って静かに祈っている姿が見えました。聞くと、私が体調を崩したことをきっかけに必死で祈るようになったと言うのです。私はイエス様が、ともに心を尽くして祈ることを私たちに必要としているのだと気づかされ、どんなことでも、イエス様をたずね求め、喜びと平安が持てるよう祈るようになりました。

心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言 3・5・6)

何度かの検査の結果、不整脈が見つかり、新たな治療が始まりました。次は心臓……。「すべて神様の導きだから」と頭では分かっている、調子が悪くなる、気分はめいっていき、平安もなくなっていきました。

の望みであり、祈りです。そのことで、思い悩むこともありませんでしたが、今では、すべての出来事には主イエス様の時があり、ご計画があるのだと安心してゆだねることが出来ます。ほんとうに感謝です。

一つひとつの出来事は、私にとつて、余計だったものは何一つなく、すべてイエス様のあわれみと導きの賜物だったと確信しています。こんな弱い私を見放さず、いつもともに歩んでくださり、私の行くべき道を確かにしてください。イエス様に心から感謝しています。

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。(詩篇 16・11)

津波倫子

沖縄県出身。一九七三年生まれ。普天間高等学校卒。沖縄キリスト教短期大学保育科卒。旧姓(喜屋武)

愛し、導き続けられるイエス様

野中 美紀



左からベックさん、お母さまの恵美さん、夫の美宏さん、美紀さん、妹の恵子さん

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならぬ。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。

(申命記 8・2)

二〇三年は、結婚四十年、受洗から三十年、娘の受洗から二十年という節目の年となりました。

主人とは見合いで結婚に導きましたが、見合いの時に、この人を教員採用試験会場で見かけた、と思いました。たくさん受験者がいたうえ、二年も経っているのに覚えていたことが不思議でした。一つ屋根の下に姑と同居するという条件など、結婚の障害となり得ることもいくつかありましたが、「この話を断ってはならない」との思いが働き、見えない力に押されるようにして結婚に導かれました。そして、ある姉妹から「美宏と美紀、名前に同じ漢字が使われているのは神様が

引き合わされた夫婦ってことですね」と言われて、結婚も御手の中のことだった、と納得したのです。結婚からの四十年間、イエス様は深いご愛をもって、御前に参じるようにと数々の悩みを通して働きかけてくださいました。

私は、この大自然界が秩序だつて動かされている事実に触れて、意思をもつてすべてを支配されている絶対者が存在するに違いないと、思春期の入り口の頃からずっと思っていました。

娘が小学校二年生の時、学校の集団心臓検診で精密検査を受けるように勧められ、すぐに医大で受診し、「心臓にいくつも穴が開いています」とショックな宣告を受けました。詳細が分かるまで、未知なる絶対者にひたすら癒しを祈り願いました。そして一週間後、別の医師から「穴なんか一つも開いていません」と言われ、安堵するとともに、尋ね求めてきた絶対者は確かにおられるのだ、と強く実感しました。

そのお方がイエス様だと分かったのはその二年後です。当時、土佐山田町の竹本兄姉のお宅は礼拝と家庭集会の場として用いられており、竹本歯科に勤務していた妹は、先に集会に導かれていました。嫁姑問題に加えて、主人とも今ひとつ心の歯車がかみ合わず暗い気持ちで過ごしていた私を、妹が家庭集会に誘ってくれました。

温かい笑顔で迎えてくださったベックさんは、お交わりの最後にイエス様を試してみるように勧めてくださり、私は早速あることを祈り、その答えはすぐにいただけました。

単純な私はそれだけでイエス様を受け入れ、十字架も何も分からないまま一年後に、山あいの川で洗礼の恵みに与りました。イエス様は願いを聞いてくださるお方、という「苦しい時の神頼み」的な幼い信仰でしたが、それでも憐れみ深いイエス様は、度々ピンチを救ってくださったり思いがけない恵みをくださったりして、

ご臨在を現してくださいました。

こんな状態で長い時間が過ぎていきました。義母は、何事もできばきとできる賢いしつかり者で、頼りないうえに仕事や家事育児と多忙な私を見かねて何かと助けてくれましたが、過干渉に思えることもありました。

「お義母さんも誘ってあげなさい」とベックさんに言っていた時、私は「おばあちゃんに天国まで付いてきてほしくありません」と答え、ベックさんをびっくりさせました。今思えば、なんと恐ろしいことを口走ったことかと冷や汗が出ます。

その後、義母は礼拝に時々集うようになり、御国に召される恵みをいただきました。しかし子どもたちは、一時は集会に集って「みこころに沿わないのは最もいけないことだ」、「イエス様の所へ行くと落ち着く」などと話していたのに、学業のため県外に移り住んでイエス様から離れてしまいました。私はそのことの重大

さにも気づかない愚か者でした。

こんな生ぬるい信仰の私に、子どもたちの結婚や就職の問題、プライドをべちゃんにされた職場での出来事、「あなたは十字架が分かってない」というある人の指摘など、三つのことが相次ぎ、否が応でも真剣にイエス様と向き合わざるを得なくなりました。

特に、子どもたちの結婚や就職については、夢の実現に繋がる道を開いてくださっていたのに、私の不信仰と愚かさそれがそれを断ち切ってしまったのだと自責の念に苦しみ、解決のためにイエス様を求めざるを得ませんでした。

ちょうど高知へ来られていたベックさんは、このことをご存知であったかのように顔を合わせるなり「家族は元気ですか」と訊かれ、強い口調で息子たちを御代田へ連れてくるよう言われました。暑い夏のことでした。

わたし自身がいつしよに行つて、あなたを休ませよう。

(出エジプト 33・14)

このみことばと共に、息子が素直に悔い改めたことなどで、私は慰められました。また、主人も車で同行することになり、主人の救いに繋がるきっかけの一つとなりました。

息子たちには子どもが生まれ、一見順調な日々でした。しかし、息子が払う家賃と持ち家のローン返済金には大した違いがないことに気づいた私は、祈り、主人にも相談し、息子たちの幸せのためと家を持つことを提案しました。息子は乗り気ではないようでしたが、「測り綱は、私の好む所に落ちた。」(詩篇 16・6)のみことばとともに条件にかなう土地が見つかり、頭金は私たちが出すこととして小さな家を建てました。

ところが、頭金は信頼していた人に騙し取られたうえに、リストラに遭い、ローン貧乏に陥つてることが判

明しました。お金に困っていることを言い出せず、随分

苦労したようでした。これを知った時、私は熱心に祈りました。しかし、目の前の現実がどのように辛いことであつても主は最善しかなさらない、ということに心の目が開かれないうままでした。賛美も感謝も無いままに、苦しい時の神頼みのような状態で祈つても、状況は変わりませんでした。結局は私たちが手を出して助けることが続き、親子ともまた苦しむ日々となりました。

彼らは、主が憎むあらゆる忌みきらうべきことを、その神々に行ない、自分たちの息子、娘を自分たちの神々のために、火で焼くことさえたのである。

(申命記 12・31)

「なんとむごいことをする人たちだろう」と、苦しくなりながらこのみことばを読んでいたある時、「これ

は私のことだ！」と愕然とさせられました。イエス様を第一としないで仕事や趣味に満たしを求めていた私を、イエス様は厳しいみことばで戒められた、と分かったのです。

イエス様にせかされるように退職し、学び会や祈り会に集い、また、独りで静かに聖書を読み祈っていると、何ともいえない平安、喜び、満たしをいただけました。どんなに楽しいことをしても、行ってみたいと思っていた地に旅しても、結局はむなしくなり満たしがなかった、そんな私に欠けていたのはこういうことだった、とやっと気づかされました。この時の到来まで、イエス様はどれだけ忍耐されたことでしょう。

主よ。あなたの道を私に知らせ、あなたの小道を私に教えてください。あなたの真理のうちに私を導き、私を教えてください。(詩篇 25・4〜5)

れた問題も、私が碎かれるため、家族と共に御前に呼ばれるために最善のものであったと、人知を超えたご計画の周到さをあらためて覚えさせられました。

自分には十字架が必要であった、と分かっていたつもりでしたが、それを体験的に分かさせられることが他にも次々起こされました。

昨年のクリスマス礼拝の日の夜、忘年会に出かけた主人から、そろそろ帰るから迎えにきてほしい旨の電話がありました。その声が酔っぱらっているように聞こえ、頭の隅に「夫に反抗してはならない」という思いがよぎったもののそれを無視して電話の向こうの主人をなじってしまいました。私の中にサタンに足がかりを与える隙があり、まんまと罠にはまってしまいました。本当は酔っぱらっていなかった主人は怒り出し、夕方までの穏やかな空気は一瞬のうちに凍り付いてしまったようでした。

すべてはイエス様から来ていることや、ペテロが失敗

ご愛とまことに富まれるイエス様は、祈り求めるならみこころを明らかにしてください、折になくて必要なみことば、メッセージ、お交わりなどを与えてくださいました。このような機会を通して、イエス様は、慰め励まし、戒め諭してくださいました。ある時は主人に関わる罪を、ある時は子どもたちに関わる罪を明らかにされ、悔い改めることに主人や子どもたちを少しずつ御前に近づけられました。

大阪の礼拝場所が息子宅のすぐ近くと分かり、建築の折に与えられたみことば通りだとうれしくなりました。その後、息子はイエス様に立ち返り、経済苦も緩和されつつあります。しかし主は、息子たちの幸せのためとばかり思っていた私の心の中に「世間体を整え、プライドを満たす」という罪が潜んでいたことをも知らせてくださいました。

悩みの中にいた時、「義母が悪い」、「主人が悪い」と思っていました。私こそ罪深い者であり、次々起こさ

すると分かっていたイエス様はそこを通された、というメッセージを思い出し、悔い改めるしかありませんでした。この失敗を通して、打ちのめされるような思いとともに、イエス様の光に照らし出されないと分かり得ない罪の存在に、またしても気づかされました。このような体験を繰り返し、その都度、落ち込みもしますが、イエス様は罪人の友として地上に来てくださり、十字架ですべてを赦してくださいました事実、に重荷を下ろし、励まされる日々です。

「神様なんていない。神様に頼るのは女々しい生き方だ」と言っていた主人は、「神様はおられると分かっていた」に変えられました。家の空気は穏やかで温かいものとなり、今は、共に喜びつつ助け合いつつ、信仰の道を歩ませていただいています。

関西在住の子どもたちは、それぞれに社会の荒波をかぶりましたが、少しずつ礼拝によび戻され、祝福もいただいているところです。

イスラエル民族が四十年も荒野をさまよったすえに
相続地を見せていただいたように、私たちも色々な所
を通されたからこそ真の平安と喜びを知るようにな
っていたきました。苦しみの時は、確かに愛の主の訓
練の時でした。まだまだ訓練が要る者ですが、日タイ
エス様のまなざしを覚えることができ、その幸せに感
謝しています。

私はあらゆる時に主をほめたたえる。私の口には、
いつも、主への賛美がある。・・・私が主を求めると、
主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い
出してくださいました。
(詩篇 34・1、4)

野中美紀(のなか みき)

一九四九年 高知市に生まれる

土佐女子高校・高知大学教育学部卒業

夫・美宏(よしひろ) 長女・めぐみ

長男・篤(あつし) その妻・未歩(みほ) 孫二人

高慢が碎かれるために 与えられた訓練

竹内悦子



数年前、私が働いているカメラ写真店に三十代ぐら
いの大柄な男性がクレームプリント(仕上がりが不満
な焼き付け写真)を大量に持ち込んで来ました。その
人は立腹していましたが、アルバイトの男子学生が適
切に対応し、プリントし直すことで納得していただき
ました。しかし、このままではすまないのではないかと
気がかりでした。

少したつて店の外にその男性の姿を見かけました。
先ほどの一件が気になっていた私が声をかけたところ、
男性は聞こうともせず喚(わめ)くばかりでした。仕
方なく「そうですか」と言うことしかできませんでした。
た。男性は一時的に沈黙しましたが、ほどなく形相が
変わり非常に激昂し始めました。「余計なことをして
しまった」と思った私は、動転してその場を離れ、必至
で「イエス様失敗しました。助けてください」と祈り
ました。

気持ちを落ち着けて店に戻ると、そこにはドカッと

腰を据えた男性が私を待ち構えていました。容赦ない罵りや脅しの言葉を浴びせかけられましたが、自分の軽率が招いたこととして男性の憤りが収まるまで耐えるしかありませんでした。

苦しみと混乱の中で主を求めました。でもお答えがありません。もがきにもがいて求めましたが、答えてくだらないのです。その時の私はみことばに飢え渴き求めていたのですが、なぜか一つも受け取ることができませんでした。息が詰まるような苦しみと、一瞬のことでしたが主にある者の絶望を味わったような気がしました。

客が帰って一人になると、イエス様の足元にひれ伏さずにはおられませんでした。「自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であること」(黙示録 3・17)を思い知らされ、あざけられ、ムチ打たれ、罪人の身代わりとなって十字架にかかられ

帰り道は遠回りし、後ろを何度も振り返り、家に着くと家中の雨戸を全部閉めました。それでもまだ不安な私を主は憐れんで、聖書のいろいろな箇所から「恐れるな。私を守る」と語ってくださいました。

わたし、このわたしが、あなたがたを慰める。あなたは、何者なのか。死ななければならぬ人間や、草にも等しい人の子を恐れるとは。天を引き延べ、地の基を定め、あなたを造った主を、あなたは忘れ、一日中、絶えず、しいたげる者の憤りを恐れている。

(イザヤ 51・12-13)

神よ。私をあわれんでください。私をあわれんでください。私のたましいはあなたに身を避けていますから。…私は御翼の陰に身を避けます。

(詩篇 57・1)

たイエス様の十字架の贖いの深い真実に初めて触れた気がしました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。…恐れるな。わたしがあなたを助ける。(イザヤ 41・10、13)

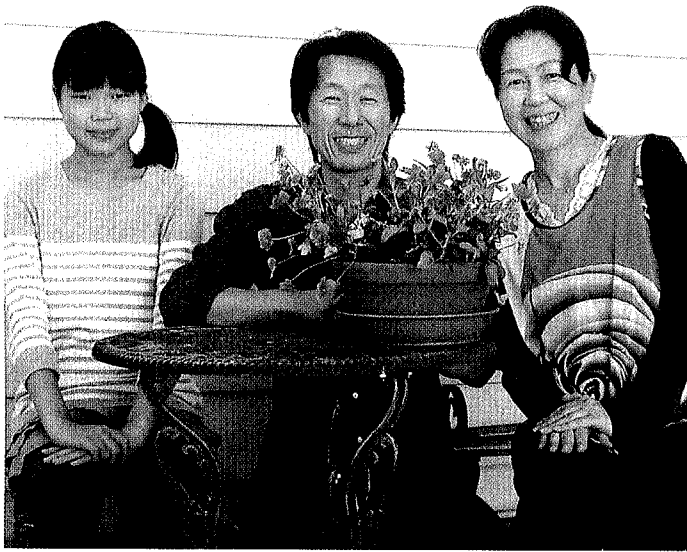
このみことばが心に浮かんだ瞬間、驚くべき声を聞いた思いがしました。「主がそうおっしゃったのか。それともそれはお前の望みのあらわれに過ぎないのではないか」と。この思いはサタンの惑(まど)わしであったことを後になって知ったのですが、このときは、このみことばが自分の望みに過ぎないのではないのかと思わされて悲しくなり、ますます弱くなりました。「そうかもしれません。でも主は私の砦。私の救い。避けどころです。こんな者ですが、どうしてもあなたに守っていただかなければなりません」と訴えました。

主はまどろむことも眠ることもなくお守りしてくださる方です。この確信と平安が与えられてようやく眠ることができました。

二日後、あの男性が「お前はワシをバカにしちゅうがか」と何度も口にしたことがふと気になりました。そんなはずはないと思ったとたん、救われて間もなくの頃、以前から高慢だと思っていた友から「竹内さんは最高に高飛車」と言われて、「そんなはずはない」と心の中で否定したことを思い出しました。考えてみれば、今までのさまざまな試練の原因には必ず自分の高慢さがあつたと気づいたのです。

この一件は、主が私の高慢を砕くためにお与えになった試練だと確信しました。主は男性の気性も用いられたのです。そのことに気づくと、あの男性に申し訳ない気持ちになりました。

そのとき、神はその人たちの耳を開き、このよう



左から娘のももさん、広喜さん、妻の康子さん

心の貧しい者は幸いです

永田 広喜

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。
(マタイ 5:3)

イエス様を知らなかった私が、妻を通して与えられたみことばです。二〇〇八年、妻は娘の通っていた幼稚園の土曜学校の友達のお母さんに誘われて近くの教会に通うようになり、救われ、同年十二月に受洗しました。

当時、妻は救われた喜びであふれており、毎日聖書を読んでは、未信者の私に、これはどういう意味か？と聞くのです。冒頭のみことばはその中のひとつでした。

私はいくら考えても、わからず、「貧しい人は食べられないでしょう、食べるのに困って早く死んで天国に行けるって言う意味だよ」と、でたらめを言っ、二人で笑ったことを覚えています。

私は、一九六〇年群馬県多野郡新町と言う小さな町で、父・喜久男(きくお)、母・豊子(とよこ)の長男

な恐ろしいかたちで彼らをおびえさせ、人にその悪
いわざを取り除かせ、人間から高ぶりを離れさせる。
神は人のたましいが、よみの穴に、はいらないように
し、そのいのちが槍で滅びないようにされる。

(ヨブ 33:16-18)

恐れは完全に失せ、喜びに包まれました。

竹内悦子

一九五〇年 高知県生まれ

夫・竹内正男 子供・二男二女 孫・三人

二〇〇三年から夫の仕事(カメラ写真店)を手伝っている

として生まれました。下に弟が二人います。両親は精肉店を営んで忙しかつたので、同居していた祖父母が私たちの面倒をみてくれました。私は特に甘やかされて育ち、そのために、こんなわがまま人間になってしまったのだと、長い間思い込んでいました。

子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。 (エペソ 6・1)

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によつて立てられたものです。したがつて、権威に逆らっている人は、神の定めにもそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。

(ローマ 13・1～2)

両親は、長男だからと言う理由で私には厳しかった

ように思います。当時、どこの親もそうだったのでしょ
うが、悪いことをすると当たり前のように殴られました。そして、長男だからと言う理由で私だけがいつも怒られるのは不公平だと思っていました。

成長するにしたがつて、この思いは両親への反抗へと変わつて行き、しだいにエスカレートして行きました。高校生になると、抑えつけようとする力に対して異常なほど反感を覚え、学校や警察にも反発するようになりました。

学校には、禁止されていたバイクで通うようになり、悪い仲間に加わり、酒、タバコ、シンナー、万引き、暴走族、高校中退、逮捕と、あつという間の出来事でした。一九七九年、十九歳のときです。二度目の少年鑑別所の中で、「今度は出られないな。少年院だな」と、考えていました。これからのことも、なるようにしかならないと、諦めていました。

裁判所で父は何も言いませんでした。母はただ泣い

ていました。そんな両親を横目に開き直り、ふてくされて、両親や裁判官に文句を言う愚か者でした。

それでも鑑別所の暗い部屋の中で、扉の外を行く車のクラクションや街の雑踏が聞こえてくると、たまらなく切なくなりました。自分だけ置き去りにされ、時間が停まつてしまったようでした。とにかく外で普通の生活がしたい、少年院には行きたくない、どうにかしてここから出たい、そんな思いでいっぱいになりました。

そんな私を主はあわれんでくださいました。

ある日、自衛隊の募集の方が面会に来られ、「自衛隊に入らないか？」と、誘ってくれたのです。しかも過去の罪をすべてなかったことにしてくれると言うのです。私は本当に驚きました。選択の余地はありませんでした。主イエス様は、真つ暗闇に進んで行く私の人生を、修正してくださったのです。

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。(イザヤ 42・16)

しかし、当時の私はイエス様を知りもしませんでしたから、この出来事がイエス様のあわれみであり、導きであつたとは思いつきもしませんでした。「なんて俺はラッキーなんだ」としか思えなかったのです。

そんな私が、康子姉妹と出会い、結婚へと導かれ、一人娘の「もも」が与えられ、娘が通うカトリックの幼稚園で、生まれて初めて「祈り」というものを耳にしました。今から十年前、二〇〇三年のことです。毎回、決まりきった文句なのですが、小さな子どもたちがまっすぐな心で神様にお祈りしている姿に、なんだか胸が熱くなりました。

そして、その五年後、妻が救われました。

私たち夫婦は一九九九年に入籍しました。結婚当初は私の両親と同居しましたがうまく行かず、二〇〇二年に妻の両親が持っていた土地にマイホームが与えられ、引越しました。傍から見れば、幸せそうな家族に見えたかもしれませんが、夫婦喧嘩の絶えない日々が続きました。

今思うと、私は自分を一番大切にする者であり、一番近い隣人である家族に対して、思いやりの心がない欠陥人間でした。少しでもプライドを傷つけられると、容赦なく相手を攻撃し、その何倍もの言葉の暴力で、相手をギャフンと言わせなければ気が済まない、そのような者でした。そしてことあるごとに、「離婚」を口走って妻を困らせていました。

イエスは答えて言われた。「モーセはあなたがたに、何と命じていますか。」彼らは言った。「モーセは、離婚状を書いて妻を離別することを許しました。」イ

エスは言われた。「モーセは、あなたがたの心がたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。」

(マルコ 10:3-5)

妻は二十代後半に潰瘍性大腸炎と言う難病を与えられ、何度も手術をしており、二〇〇一年には大腸を全摘しました。「悪い所を取ったのだからもう安心」と、浅はかな私は胸をなでおろしておりましたが、人間の体はそんな単純なものではありませんでした。大腸がなくなったことの妻の身体的ダメージは相当なものでした。トイレの回数が増え、体力もなくなり、疲れやすくなりました。その他、私には解らない様々な辛いことがあるようです。

妻への思いやりがあれば容易に察しが付くことなのに、自己愛しか持ち合わせのない私は妻を責めてばかりいました。小さな娘の前で妻に罵声を浴びせました。涙を流しても容赦なく怒鳴り散らしました。娘

しようもない者でした。

そんな頃、妻は近くの教会に通うようになり、結婚前のような満面の笑顔で喜ぶようになりました。当時の私はなぜ聖書を読んで嬉しくなるのか理解できませんでした。喜びの絶頂の妻に対して、私は苦しみのど真ん中におりました。

私は三十九歳で結婚するまで、実にいい加減に生きてきた男です。まさか結婚できると思っていませんでしたし、また、結婚したいとも思っておりませんでした。仕事に対しても、投げやりで、人まかせで、嫌になったら辞めればよいという姿勢でしたので、何度も転職しました。そんな男が子どもを与えられたことにより真面目に働かなくてはならない状況になってしまったのです。現在私が働いているのは、十五人足らずの小さな製麺工場ですが、なんとこんな者が工場長になってしまったのです。ちょうど妻が救われる一年ほど前でした。

「工場長らしくなる、工場長と言う肩書きにふさ

は、近くに住む妻の両親へ電話して助けを求めました。繰り返し、繰り返し、同じようなきつかけで喧嘩になりました。そのあとで自己嫌悪に陥り、落ち込みますが、なかなか謝れませんでした。

夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいい
ません。
(コロサイ 3:19)

もともと陽気な性格だった妻が、家を建ててから、細かい嫌な性格になってしまったのは何故だろうか？本当はこんな嫌な女だったのか、と思うようになっていて、家の玄関を開ける瞬間が嫌でたまりませんでした。「ただいま」と言うのも、どういうふうに言えばいいのか玄関の前でしばらく悩み、心の中で練習してから帰宅しておりました。今日は機嫌が良いだろうか、体調は良いだろうか、と顔色をうかがいながらも、妻の何気ない一言や、表情に腹を立て、突然怒鳴りまくる、どう

わしい人間になる」という見えない重圧がのしかかってきました。信頼を得たい、尊敬されたい、そんな願望がフツフツと湧いてきました。何の下地も経験もない者の雲を掴むような願いでした。

ものわりの良い人間になる努力は、頑張れば頑張るほど、遠のいて行き、自分には手の届かないもの思えてきました。かえって望んでいるものとは正反対のダメな、汚れた愚かな自分がうきぼりとなり、愕然としました。

いつも穏やかで、思いやりがあり、どんな状況においても冷静に問題に対処できる人間。そのような人が私になることを、会社の社長や私の家族も望んでいる、そうに違いない。そう思い込んで努力しました。しかし結果は惨憺たるものでした。「いつも穏やか」ではないのです。「どんな状況でも冷静」に対処できないのです。私のわがままで何人も会社を辞めて行きました。社長や専務の私をみる目が気になりだしました。

ス様だったんだ」、素直にそう思いました。

こんなにも愛のない、自分中心な貧しい者を、主イエス様はあわれんでくださり、ずっと愛していただくだったので。この事実が目が開かれたとき、今まで経験したことのない喜びに満たされました。

妻と娘がその頃よく歌っていた賛美歌に、「主我を愛す、主は強ければ、我弱くとも、恐れはあらず、我が主イエス、我が主イエス、我が主イエス、我を愛す」というのがありました。この歌に私は何度も励まされ、涙しました。喜びの涙です。二〇〇九年の春、私はイエス様の所に帰ることができました。

状況的には、相変わらず仕事はきつく、私はわがままで弱いままですが、主が共にいてくださり、主が愛してくださっている。この事実を心に向けるとき、恐れや不安はなくなります。イエス様は、こう言われました。

した。このままではマズイ、今度は自分が辞めるハメになる。そう思い、さらに頑張りました。底なし沼でした。私はいつしか心の中で、「もう無理です、助けてください」、そのように助けを求めているのです。

そこで、イエスは答えて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」

(ルカ 5:31-32)

そして私は気づきました。助けを求める私のすぐ近くに、すでにイエス様はいてくださったのです。イエス様は妻を通して「私のところに来なさい」と、語ってくださいました。妻は言いました。「困ったことがあったら、イエス様にお願ひすれば大丈夫だから」。なんだかすごくほっとしました。「ああ、助けてくれるのはイエ

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。(マタイ 11:28-30)

あなたはそのままが良いよ。あなたの今思っていること、感じていること、失敗したこと、人を傷つけてしまったこと、全部わたしに話さない。わたしが解決してあげます。そのようにイエス様は言うてくださいます。そんな愛そのもののイエス様に、私のすべてを委ねて歩めるようにと、祈っています。

二〇二年より、この集會に導かれ、多くの兄弟姉妹との交わりを与えられておりますのも、主イエス様のあわれみであり大きな恵みです。また、二〇二年より

群馬にも伊勢崎集会がおこされましたことも、本当に感謝です。私自身は何もできませんが、目の前のひとつひとつをただ感謝して、主イエス様にすべてを委ねて従って行けるように、また私たちの周りのイエス様をまだ知らない方の救いを、妻と娘と共に、祈って行きたいと思っています。

そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行なった良いわざについてであり、その人が何によっていやされたか、ということのためであるなら、皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。」

イエス様は、脱出の道を 備えてくださいます

永田 康子



右から夫の広喜さん、奥が康子さん、手前が娘のももさん。みなさんと

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」（使徒 4・8、10、12）

永田広喜（ひろよし） 一九六〇年、群馬県多野郡新町（現在、高崎市新町）生まれ。陸上自衛隊新発田駐屯地勤務を経て、現在、根岸物産（株）勤務。

妻・康子（やすこ） 娘・もも（中2）

群馬県高崎市倉賀野町在住

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

（一ヨハネ 4・10）

私たち夫婦は、共通の友人を通して知り合い、しばらく付き合い、別れ、また付き合うという関係にありました。その関係にも十年以上前の一九九九年十二月にピリオドが打たれ、夫婦となりました。翌年、娘「もも」が生まれたのを機に、家庭を築き始め、家族中心の暮らしが始まりました。しかし、ささいなことでお互いの意見をぶつけては、いら立ち、けんかになることもたびたびでした。けんかをするたびに、どうしてこんなふうになってしまうのかと落ち込み、結局は相手への不満を見つけ、ため息をつくしかありませんでした。小さな娘を巻き込んでしまったときなど、さらに落ち込み、わずかに反省するものの少し経つとまたお互い

を責め合い、けんかになるお決まりのパターンでした。

特に私は自己中心的で、自分の思い通りにいかないとへそを曲げる身勝手な者でした。やがて、この自分中心の考えは神様が嫌われる大変な罪であると知るのですが、それが間違いだとかわかるようにと神様はいくつもの試練をお与えくださいました。

二十六歳のときに、潰瘍性大腸炎という、下痢と出血を繰り返す原因不明の難病を宣告されました。主人と知り合い、付き合うなかでも、病気を甘くみており、症状も不安定でした。それでも若さを過信して、ほとんど毎晩飲み歩いておりました。当時はバブル期で朝まで営業していたお店も多く、昼夜逆転した生活を送っていた時期もありました。当然、体は悲鳴を上げ、フラフラになつては入院、点滴を受ける治療を年に何度も行いました。それでも少し良くなると出歩いていました。

三十四歳のあるとき、とうとう大腸が破れて緊急

手術を受ける破目になり、緊急だったので麻酔が合わず大変苦しみ、手術後は全身管でつながれ身動きできない状態が続きました。六階の病室の窓から見える景色がすべてでした。そのような姿で何日か過ぎていくなか、あることに気がつきました。それは自分がこんな大変な思いをしているのに、太陽はなにごともなく東から昇り西に沈んでいく、それが毎日繰り返されていること。今まで当然だと思っていたこの繰り返しを見ながら、生まれて初めて自分はちっぽけな者なんだ、と気づかされたのです。担当の看護師さんに「手術後はね、ゆっくり少しずつ回復していくものよ」と言われ、じっと我慢が強いられた二ヶ月間でした。小腸・大腸が広い範囲で破れていて、右の卵巢とその周辺も切除されました。「普通に妊娠するのはむずかしいかもね」と医者に言われて、さすがにいろいろ堪(こた)えた入院生活でした。

しかし翌年の夏、妊娠していることがわかりました。

三十五歳のときです。ところが、七ヶ月にはいったある夜、強い腹痛があり、病院に運ばれ胆石症と診断されました。そのまま入院となり、腸の難病と産科と胆石症とかけもちして診てもらうことになりました。続いて切迫早産の危険も生じ、毎日が治療と検査の連続でした。結局入院したまま出産を迎えました。子供は一ヶ月早く自然分娩で出産されました。早く小さく生まれたので私の体の負担は軽くすみ、胆石の手術も予定より早くできました。今、すべてが主の御計らいだったと確信しております。しかし、当時の私は、自分のことだけを心配していました。とにかく物事がうまく運ぶようにとそればかり願っておりました。

胆石の手術も無事に終わり、保育器から出られた娘といっしょに、退院できました。ようやく主人の実家の二階で三人そろっての暮らしが始まるうとしていました。しかし、わずか三ヶ月で難病が再発、一気に悪化していきました。プレドニン薬を大量に使用しました。

が、効果はほんの少して副作用が強くあらわれました。このまま薬を使い続けるとどうなるのかと心配し、怖くなりました。ある夜、主人に「もし自分だったらどうすると思う」と聞くと、「俺なら全部取っちゃうけどな」とあつさり言われました。確かに大腸がなくなれば、薬もいらない、病気ともおさらばできるかもしれないと考えました。そして実際に主人の一言が決め手となり、外科手術に踏み切る決心がつきました。二〇〇一年四月と十月、二回に分けて手術が行われました。一歳ちよつとの娘は実家で預かってくれました。手術は予想以上にきつく、苦しく大変な経験でした。心の支えは主人と娘「もも」でしたが、心のなかではとんでもないことをしてしまった、もう元には引き返せないんだ、と叫んでいました。

大腸のない現実の生活は容赦なくやってきました。日常のほとんどを排便に取られ、痛みと不快感の連続でした。ダメージは大きく、体力も自信もなくなってい

きました。そんな時期に、主人の実家を出てマイホームを建てることになりました。何か大きな力で押し出されていくようでした。

それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。(創世記 2・24)

三人で暮らし始めた家族中心の生活は、自由さと不自由さとを味わいながら、けんかのたびに相手と向き合い、自分を見つめる機会となりました。主人は仕事に責任を強めていき、工場長を任せられたあたりから、時間的にハードな生活を送るようになりました。週二度のお休みも水曜日なので週末は娘と二人で過ごすことがほとんどでした。二人で出かけるにもトイレに行く制限が気になり、神経を使いました。そんななか、ちょちょこお酒を飲むようになり、再びお酒が欠かせない生活に戻ってしまいました。夕食の団らんにもお

酒がありました。キッチンドリinker同然でした。あれだけ大きな手術をして周りや家族にも迷惑をかけたのですから、少しは自制してもいいはずなのですが、お酒はやめられず、体調を崩してこまったときだけは弱くなった体をたてにして同情を求める、という矛盾を顧みようとせず、ただもがいていました。ここまですぐ十四歳でイエス様と出会う前の自分の姿です。

二〇〇八年五月、娘が小学三年で近所の教会主催のバーベキューに誘われ、娘はお友だちと参加しました。これをきっかけに、その夏のバイブルキャンプに親子で参加しました。キャンプでの聖書メッセージは子供向けでわかりやすく、和やかな雰囲気のおかげで、小グループに分けられて順番に祈り始めました。小学生の女の子が自分のことばでイエス様に祈る姿に、涙がポロポロこぼれてきたのを覚えています。「今度日曜日の午前に礼拝があるからぜひ来てくださいね」と誘われ、九月ごろから礼拝に集うようになりました。

私は小学生のとき土曜学校に行ったこともあり、学生時代はキリスト教主義の学校で宗教の授業もあり、聖書を開き賛美歌を手にして歌いながらも、本当の神様を知ろうとしない者でした。しかし、初めての礼拝からわずか三ヶ月後のクリスマス礼拝の日に洗礼を受けました。とにかく、毎日が非常に新鮮で、寝ても覚めても聖書、聖書で、聖書が語る世界に引き込まれていきました。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。(詩篇 119・130)

次々に罪が照らされて、その都度イエス様に正直に告白しました。そして、あなたの罪は赦されているという恵みに涙を流して、感謝する日々でした。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は

真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ 1・9)

自分では忘れてしまおうとふたをしていた古い罪も、痛みをとめないながら主の光の前に出されることで、重くのしかかっていた負い目が軽くなっていきました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。(マタイ 11・28・30)

自分の力ではどうにもできない過去の罪も、イエス

様が全部背負って罪の代価を払ってくださったことを知り、こんな自分のためにと思いつつ、心から喜べました。日々の生活がイエス様への感謝と喜びであふれるものとなりました。

娘もイエス様が神様だと信じていたので、覚えてたの賛美歌を歌い、イエス様の話で盛り上がると、そこに主人も自然に加わるようになりました。

私の受洗からわずか十ヶ月後、主人もあれよあれよという間に導かれ、洗礼を受ける恵みにあずかりました。主の恵みは大きく、主人の定休日も日曜日になり、家族そろって礼拝に集うことができ、時間の許す限り教会で過ごしたいという強い思いが起こされました。自分たちができることを喜んでしようと頑張り、聖書を理解しようと成長セミナーのCDやインターネットを活用し始めました。しかし、その年が明けたころから、異言といやしについて疑問を感じるようになりしました。

にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。(マタイ 24・24)

異言について、気になったことは、「もし解き明かす者がだれもいなければ、教会では黙っていないさい。自分だけで、神に向かつて話さない」(1コリント 14・28)のみことばでした。

解き明かす人がいない教会で、何と祈っているのかわからない異言が、礼拝の席でも所どころで聞こえてくることに不快感をもち始めました。午後の交わりの後での異言での祈りの最中、「もしここに自分の親が入ってきたら、何と思うだろうか」と考えたりもしました。「もう私はこの教会では祈れないかもしれない」と思い始めると、礼拝にはいけなくなりました。何も知らない主人は私のつまずきに心から心配してくれて、「少したったらまた行けるから」と祈っていてくれ

ました。本当のことを言わなければ前に進むことはできないと思い、礼拝から帰ってきた主人に心のうちを隠さず話しました。主人の顔色が変わり、「そのくらのことで、いちいちいいじゃないか」と怒り出し、「俺は牧師につくから、こんりんざい聖書の話はいつさいしないでくれ、もしかしたら離婚も覚悟しなければならぬ」と相当な勢いでした。私も負けじと聖書を出して、「ここに書いてあるじゃない。聖書にあるじゃない」と応戦しました。夕方になり、主人が「祈ろう」と言い、とても一緒に祈れる状態ではない中でお祈りをしました。それから数日がたち、主人が一言ポツリと言いました。「確かに聖書に書いてある」。私たちは教会を出ることで一致しました。そろって牧師夫婦にあいさつに行きました。「たったそれだけのことで、もったいない」と言われショックでした。未熟ながらも聖書は何と言っているかが最も大切だったので、みことばだけが頼りとなりました。

このころ、「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい」(エペソ 5・22)のみことばが繰り返し目に入るようになりました。このような中にあって、自分の身に大きな変化がありました。少し飲むだけで頭が痛くなり、はきけがしました。これ以上飲むのは怖いと思うようになりました。ピッタリやめることなどできるわけがないと思っていましたので、主の大きなあわれみにおそれと感謝でいっぱいです。

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」(ルカ 18・27)

教会へ行かなくなり、礼拝の場もなく、信じていたものに裏切られたような思いのなかで、主人と二人で教会への批判を口にし、恨みごとを言ってはショックの傷をなめ合っていました。そのうちに、自分たちを救い出してくださる、赦してくださる、死んでくださ

り、導いてくださっているのは誰か、と考えたとき、私たちの行く先はイエス様のところ、そのイエス様ご自身が、「わたしは道である。いつも、あなたがたとともにいます」と言ってくださっている、という事実にあ堵するようになりました。そんなとき、御代田集会の日曜礼拝に導かれました。みことばと賛美と祈りだけの礼拝に驚き、「誰かが裏にいるのでは」と疑いましたが、主人が「ここがいい。ここにしたい」と言うので、少し迷いましたが、「妻たちよ。自分の夫に従いなさい」のみことばを思い出し、従うことにしました。私の心配していたような黒幕はどこにもいませんでした。ただイエス様だけがご臨在されていたのです。

集うにつれて、頼みの綱はイエス様だけだとますます思うようになり、するがる思いがわいてきました。けれども心の奥では、するがる思いをもつなんて弱い者のすることではないかと反発もあり、「イエス様。私は二心のある罪人です。自分で自分を救えないので助けて

ください」と告白せざるを得なくなりました。病気のとき、もう我慢できない、がんばれないと何度も思いました。主人との関係も、けんかをするたびに、情けない、どうしようもないと叫んでいました。お酒もやめられない、自分の力では無理だと思っていました。教会のことでも、もう礼拝に行けない、教会で祈れないと苦しみました。でもそのようなとき、イエス様は必ず関与してくださいました。自分の弱さを認めて頭を垂れる者をイエス様は必ずあわれんでくださる、ということを経験のなかで教えていただきました。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

(2コリント 12・9)

主人の両親は教会での主人の洗礼式にもお赤飯をたいてお祝いに来てくれました。主人を通して、みことばや祈りの時間もイエス様が与えてくださっており、ました。二〇二年九月、父、永田喜久男は子供のようになり、眠るように天に召されていきました。孫の「もも」との最後の会話が「また、教会に行くからね」でした。今、母、豊子は八王子におりまして、町田の集会、礼拝に何度か導かれております。

私の両親は、私たちのすぐ近くに住んでいて、私たちの信仰を認めてくれています。高崎の教会から御代田集会へと移ったときは、遠いじゃないかと心配していましたが、日曜日は神様にささげる日と覚えてくれているので、感謝しています。二〇二年秋、群馬の伊勢崎に礼拝の場が起これることも大きな恵みです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。(使徒 16・31)

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10・13)

イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。(ヘブル 13・8)

永田康子

一九六四年、群馬県高崎市に生まれる

新島学園、スクールオブビジネス石黒学園卒

夫・広喜 娘・もも(中2)

主は与え、主は取られる。 主の御名はほむべきかな

小泉 哲男



妻の貴子さんと

私は一九五四年六月、神奈川県横浜市で生まれ、小学、中学、高校時代を横浜、静岡、横須賀で過ごし、大学卒業後東京にある外資系企業に入社しました。会社の転勤命令により中東のアラブ首長国連邦アブダビ、名古屋、大阪、そして香港勤務が与えられました。二〇〇八年十一月にリストラで三十年勤続した会社を退社し、その後再就職により外資系企業での仕事を与えられましたが、二〇一三年八月に再度職を失いました。一九八六年、三十一歳で妻、貴子と結婚、二人の息子が与えられました。二〇一二年、次男の結婚により二人の娘と二人の孫が与えられました。

主が私に与えてくださった数えきれない恵みと導きのいくつかを証しさせていただきます。

1 神戸での洗礼

あなたは自分の惡に抛り頼み、「私を見る者はな

い。」と言う。あなたの知恵と知識、これがあなたを迷わせた。だから、あなたは心の中で言う。「私だけは特別だ。」

(イザヤ 47・10)

ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてください。あなたのためです。あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してください。あなたからです。・・・あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしはらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

(1ペテロ 5・6〜7、10)

転勤により名古屋に住まいが与えられ、初めて名

古屋集會に導かれました。しかし私の役割は家族の運転手として礼拝の場所まで行くことで、礼拝には参加しませんでした。その後大阪に転勤となり、神戸に住まいが与えられました。神戸集會は当時、住まいから車で五分ほどの田中公會堂で礼拝がもたれていました。私は、礼拝には参加したものの非常に「消極的」で、つねに一番後ろの席を確保しておりました。聖書に真理はあるように思われましたが、確信には至りませんでした。礼拝の帰り道、「聖餐に何故あずからないのか」という妻の質問に、私はその時はっきりと「私に神は必要ない」、「確信が持てない」と告白しました。しかし主は、その直後にそれに応えて、神奈川の実家に住んでいる両親に働きかけられました。

母はパーキンソン病で、以前から長い間患っていたのですが、そのような中で、母が頼りにしていた父に脳梗塞が突然与えられました。右半身不随、言語不能、さらに重度の認知障害となっていました。リハビリ

リ等も試みましたが状態は悪化する一方でした。このことで母には、一時的に極度の認知障害が起きてしまいました。

そのような中、長男として、人として何ができるか、と人間的な脱出の道をつねに考えました。しかし主は、わたしに委ねてみないか、とみことばをもつて語りかけてくださり、委ねさせていただきました。「私に神は必要ない」、「自分だけは特別だ……」という思いこそ罪であることを示されるとともに、主に委ねるなら主が働いてくださる、ということを確認でき、洗礼の恵みにあずかりました。

2 香港へ転勤

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆

らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。

(ローマ 13:1-2)

そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。

(使徒 16:30-31)

両親が入退院を繰り返している中、香港への転勤命令が出されました。どう考えてもそのような状況での香港勤務は無理だと思い、妻にも相談せず、その命令を断りました。しかし断っても受け入れられなかったため、正式に文書による退職届を出したのですが、なぜか退職届も受理されませんでした。人間的な判断に主は同意してくだいませんでした。主の意向は

「さらに委ねなさい」ということでした。香港への転勤

は主の命令によって決められたのだと受け止めました。転勤の話聞いた母は、パーキンソン病がさらに悪化し、自分自身が管理できないほどの認知障害を起こしてしまいました。まさに主に委ねるしか他に方法がありませんでした。しかし三年間の香港勤務中、主は両親を守ってください、病気の両親と百歳に近い祖母の三人が守られて生活することができました。

私たちの帰国に合わせたかのように、帰国後すぐに父が召天しました。さらにその後、母の召天と続きました。父、母ともに吉祥寺キリスト集会で葬儀を行うことができました。後に、母の姉から母へあてた手紙が見つかり、そこには「キリスト様が一番」と書かれてあったことは大きな驚きと喜びでした。その後、自宅にあった仏壇・仏具・位牌等を自宅の庭で焼却いたしました。神戸集会での洗礼から始まり、香港転勤、帰国へと世界をまたぐ形で、主の導きとみわざを体験さ

せていただきました。

主は、大きな救いのみ手を、父母をも含めた家族に差し伸べてくださいました。

3 会社のリストラにより二回の失職

私は一心に知恵を知り、昼も夜も眠らずに、地上で行なわれる人の仕事を見ようとしたりとき、すべては神のみわざであることがわかった。人は日の下で行なわれるみわざを見きわめることはできない。人は労苦して探し求めても、見いだすことはない。知恵ある者が知つていると思っても、見きわめることはできない。

(伝道者 8:16-17)

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦勞は何もそれに加えない。

(箴言 10:22)

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。

(ミカ 6・8)

私は、仕事に向かう自分の態度は勤勉・誠実、と思っていた。また、初めに勤めた会社では三十年勤続、無遅刻無欠勤でグループの代表から感謝状をいただきました。しかしその時、自分の中で高慢の罪の根がさらに大きく張り巡らされたでしょう。主はこの時を待っていたかのように、その五か月後、リーマンショックの中、リストラでの失職へと導かれました。

人間的な判断に基づく仕事への貢献など、主の前には何の価値もないものだと思われました。その時、「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」(ヨブ 1・21)のみことばが与えられました。主の御名の

みがほめたたえられるべきものでした。

しかし主の導きはそれで終わりではありませんでした。その後二度目のリストラを経験することになりました。四年八か月勤務した会社の東京支店が閉鎖となり、最後の数か月間は閉鎖へ向けて対顧客責任者としての仕事をし、二〇三年八月末日、二回目のリストラ退職を経験いたしました。

今は失職中ですが、次に主が与えてくださるみわぎを期待して待つ毎日です。

こうしたことを通して、思い上がりの罪を示されました。主は取られるが、それ以上のもの、主とともにある恵みを与えてくださるお方であることを体験しました。

4 孫の誕生

あなたには、すべてができること、あなたは、どん

な計画も成し遂げられることを、私は知りました。私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。ヨブの娘たちほど美しい女はこの国のどこにもいなかった。彼らの父は、彼女たちにも、その兄弟たちの間に相続地を与えた。

(ヨブ 42・2、5、6、15)

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

(ヨブ 1・21)

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ 1・9)

主は、次男の子どもである孫を授けてくださいまし

た。新しくいただいた家族、生命をとおしてあふれるばかりの恵みを主からいただきました。孫には生まれながら後頭部に腫瘍が与えられておりましたので生後二か月で手術、しかしそれでは完治せずその数か月後再手術となりました。このことで若い親たちにも試練が与えられております。

冒頭のヨブ記が語りかけました。主は何か大切なものを犠牲にして取られるが、必ずそれ以上の恵みが与えられると。今後の主のご計画はわかりませんが、主のみの手の妨げとならないように、ただ祈るのみです。

5 主の恵み

さまざまな出来事を通して主は私に、常に他人と比べ、人を恐れ、自己中心で、自分の力で何かをしようとし、主の存在を遠ざけていた罪があることを示されました。しかし主は、罪の存在だけではなく、救いのみ手をも示してくださいました。自分では何もできな

い、そのような何もできない哀れな自分を知った時、空虚な心の中にイエス様の光が差し込みました。妻とともに静まり祈る時を与えてくださいました。

光があり闇がある。朝が来て夜が来る。風が吹き雨が降る。心に思うことがあり言葉がある。喜びがあり試練がある。すべて主の完全な秩序の中にあると思う時、すべて主の完全なご支配の中にあると思う時、主の完成した愛の中にあると思う時、私たちは恵み降り注ぐ主の中に存在していると確信できるようになりました。

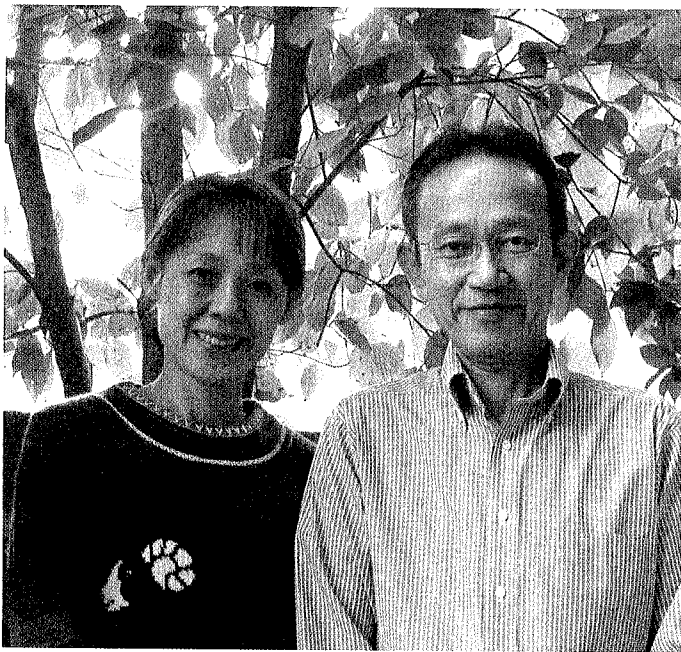
主に向かつて祈る時、悔い改める時、罪がイエス様の十字架ですでに赦されていると知る時、そのような時に必ずみことばをもって清め、新しくしてくださる主イエス様に感謝いたします。

小泉哲男／一九五四年六月、神奈川県横浜市長生まれ
妻・貴子、長男・宏貴、次男・直也、次男嫁・智代、
孫・結愛

神奈川県立横須賀高等学校、立教大学
元HSBC銀行勤務、元ロイズ銀行勤務

主よ、あなたの恵みは いとも深いのです

小泉 貴子



夫の哲男さんと

ここにいらっしゃる方々はなんて美しいの？なんて穏やかなの？この輝きは何？この方々が持つていらっしゃるものが私には無い、私も欲しい、と心で叫んでおりました。主は、静かに私に近づいてくださり、真実を明らかに示してくださり、深い愛をもって導き続けてくださいました。主をお証しできる恵みを感謝いたします。

彼のことを伝えられなかった人々が見るようになり、聞いたことのなかった人々が悟るようになる。

(ローマ 15・21)

私は、学校卒業後航空会社に就職いたしました。六年経ったころ主人と出会い、結婚して主人の両親、祖母と同居を始めましたが、次男の育児休職中に主人の転勤で名古屋に住むことになりました。一度だけ仕事でご一緒した会社の上司から誘われて、家族四人そろって主のもとに導かれました。宣教師ベックさんをご

紹介いただき福音を聞きましたが、お話はほとんど覚えていません。ただ、真実がありそうだと主人が直後につぶやいたことと、集っていらした方々との強烈な出会いによって、当時仕事を通して魅力的に思っておりました豊富な知識、熟練された仕事ぶり、向上心、優雅な動作、洗練された身なりなどが色あせ、影が薄くなつていきました。会社を退職し、主人の次の転勤で神戸に移り住みました。そこでの日曜礼拝や家庭集会のメッセージ、お交わりによって、集っていらつしやる方々が輝いているのは、イエス・キリストの十字架によつて罪が赦され、罪から解放されていること、聖書のみことばが生活の土台になっていること、困難、苦しみを通してイエス様の愛を体験しておられる、といったことから来ている、と気づかされました。自分のわがまま、自己中心、偽善、妬み、憤りなどは神から遠く離れた状態から生じることであり、罪であることがはっきりと示され、「ごめんなさい、イエス様と出会えたこ

ていました。病いに苦しんでいた父に、主は個人的に語ってくださったのだと確信し、感謝しました。

主人には、主人の父の病状が厳しい最中に香港転勤の辞令が出ました。介護を必要とする重度障害の父、パーキンソン病の母、九十歳を超える祖母を実家に残して香港に転任できるはずはない、と思つていましたが、避けることはできず三年半滞在しました。

約八年に及ぶ転勤生活の後、一九九八年一月から四世代七人の同居生活となりました。父と祖母は私たちの帰国後ほどなくして平安のうちに天に召され、母はパーキンソン病に加え大腸癌となり、肝臓への転移もあつて、私が母の生活に介入することになりました。

昼夜逆転の日々が続いたある夜中、何回も鳴り続いた母の呼び出しベルに苛立つて母の部屋に入り、母から「この家には貴子さんが二人いるの?」と言われて愕然としたこともあります。イエス様を知つていても、厳しい環境につぶやいてしまう、愚かな私でした。

とを感謝します」と一九九二年四月に受洗しました。ほどなくして主人もイエス様を受け入れ、主イエス様を土台とした生活がスタートしました。主は、実生活を通して私たちを養い育ててくださいました。

あなたがたは、羊のようにさまよつていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰つたのです。(1ペテロ 2・25)

私たちが新たな歩みに移されてすぐに、主人の父は重度の脳梗塞、そして私の父は病により余命を告知されました。私たちはすぐ両方の実家に、福音の書かれた本や、メッセージの録音テープを送りました。私の父は静岡におりましたから、療養生活の様子はわかりませんでした。亡くなった父を病院から実家へ父の車で運んだ際、車のデッキにベックさんのメッセージテープ(「聖書と病氣」)が差し込まれた状態になつ

そんな折、ベックさんが母のお見舞いに来てくださいました。母はそれまでは私たちの信仰を認めながらも、自身は以前と変わらない生活をしていました。しかし、ベックさんのお見舞いの後は喜びの表情を隠さず、聖書の詩篇を読み、眠れないとき聖書のメッセージを聞いて安らかな眠りに入ることもありました。そしてついに主は母に臨んでくださいました。ある日、台所にいた私は、呼ばれて母の許に行くと、母は涙を流しながら「私は罪人だね」と言い、知っている讃美歌を口ずさみました。私も涙があふれ一緒に讃美しました。萎える母には霊の満たしが一番必要だったのです。もちろん私にも。主は母が苦しいときに寄り添い、希望で満たしてくださり、私は御霊に満たされる必要性を強く覚えました。

二〇〇八年はリーマンショックの年で、当時主人は五十四歳、同じ会社三十年以上勤めていましたが、その日は突然訪れました。主人は、会社から退職勧告を

受け、一日たつてから事の次第を話してくれました。ま
る一日主との静かな交わりの中に身を置いていたの
でしょうか、静かに落ち着いていました。私は主人をね
ぎらうどころか、心配と不安が襲ってきましたが、祈
りました。主人と共に祈りました。主人は過酷な職
場、それに対して湧き上がる自分の思いから主が救い
出してくださった、と話してくれました。先のことは
わからない状況でしたが、平安にすっぽりと包まれた
ようでした。仕事に拘束されない恵み、リフレッシュの
時でありました。なかなか集えない家庭集会にも共
にたくさん集うことができました。五か月後に新しい
職場を与えられ、職場が変わったことにより、長い間
主人と一緒に参加したいと願っておりましたドイツ喜
びの集いに参加できました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

(伝道者 3・11)

わたしたち家族は四人そろって主の元に導かれまし
たので、二人の息子たちも高校までずっと一緒に日曜日
は礼拝に、時には喜びの集いにも導いていただしていま
した。ところが息子たちが大学生になり、離れて暮ら
し、アルバイトも始めて自由に使えるお金が入ると、
どんどん主から離れ、居心地の良いと思うところへと
身を置くようになりました。

二〇二二年二月、主人から留学中の大学四年の次男
に起こされたことを告げられました。息子自身もこと
の重大さに直面し動揺していることがわかりました。
この事実を通して、世間体を気にする自分、嘆きと絶
望感でいっぱいになっている自分が明らかになりました。
た。主人と共に祈り静まることができると、私たちも
イエス・キリストの十字架によって赦された者であり、
裁くべきではないと御霊によって知ることができ、祈り
合える恵みに感謝いたしました。主は御心をみことば
と共に示してくださいました。二〇二二年八月、主は息

子を御代田若者の集いに導いてくださり、息子本人の
口から若い兄弟方に報告させていただきました。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに
答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事
を、あなたに告げよう。

(エレミヤ 33・3)

わたしは、彼らがわたしに犯したすべての咎から
彼らをきよめ、彼らがわたしに犯し、わたしにそむ
いたすべての咎を赦す。

(エレミヤ 33・8)

見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主であ
る。わたしにとってできないことが一つでもあるのか。

(エレミヤ 32・27)

彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神とな
る。わたしは、いつもわたしを恐れさせるため、彼ら

と彼らの後の子らの幸福のために、彼らに一つの心
と一つの道を与え、わたしが彼らから離れず、彼らを
幸福にするため、彼らとどこしえの契約を結ぶ。わ
たしは、彼らがわたしから去らないようにわたしに
対する恐れを彼らの心に与える。

(エレミヤ 32・38〜40)

この恵みの中に、しっかりと立っていなさい。

(1ペテロ 5・12)

すべてのことはあなたがたのためであり、それは、
恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあ
ふれ、神の栄光が現われるようになるためです。

(2コリント 4・15)

二〇二三年七月、御代田喜びの集いで、ヨハネの福音
書の8章1〜11節からメッセージをいただきました。



左が弘子さん、お母さまを囲んでみなさんと

イエス様は母を あわれんでくださいました

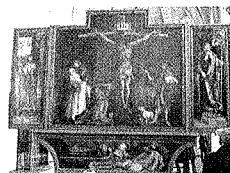
大須賀 弘子

イエス様は威厳に満ちた態度で刑を否定するのではなく、刑から救うお方、命を与えるお方であることを私自身が体験させていただき、深い喜びがわいてきました。息子の問題とと思っていたことを通して私自身の罪からの解放の体験でした。

それから一週間後、若い兄弟姉妹の神聖なる結婚式に、主は私たち家族全員を招いてくださいました。主の限りないご愛を深く覚え、ただただ主に感謝いたしました。主は私がつとも忌み嫌っていた罪を通して私を解放してください、さらには家族を増やしてください共に歩む恵みをいただいております。

まことにわが家は、このように神とともにある。とこしえの契約が私に立てられているからだ。このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。

(2サムエル 23・5)



二〇一〇年ドイツ喜びの集いで訪れたコルマルにあるウンターリンデン美術館、グリユーネバルトの「十字架のイエスを指さすバプテスマのヨハネ」の絵がいつも私に語りかけてくださいます。

見よ、世の罪を取り除く神の小羊。(ヨハネ 1・29)

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。

(ヨハネ 3・30)

小泉貴子／一九六〇年静岡生まれ

由比町立由比小学校、静岡雙葉中学校・高等学校、相模女子大学短期大学部英文学科、元日本航空国際客室乗員部勤務

夫・哲男、長男・宏貴、次男・直也、次男嫁・智代、孫・結愛
母・久保田幸江

そこで彼らを呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない、と命じた。ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」

(使徒 4・18、20)

母、岡村末花(まつか)は、二〇一三年六月十八日に七十八歳で天に召されました。高知県の山間部で六人兄弟の末子として生まれ、気が強く、頑張り屋さんで、プライドが高い人だったように思います。二十一歳で公務員の父と結婚し、姉と私の二人の娘が与えられ、その後は看護師として勤務しながら私たちを育ててくれました。母は四十六歳で、クモ膜下出血で緊急入院し、開頭手術を受けました。それから母はおしゃべりになり、話し出すと止まらなくなっていました。

した。自慢話が多く、周りの人たちから嫌がられることもありました。また、怪我をすることも多くなり、たびたび病院に入退院を繰り返しました。

そんな中、私が救われて間もない頃に高知で開かれた喜びの集いに母は来てくれたのですが、とてもきつい表情で、私には母の頑なさだけが心に残りました。

一九九四年四月に夫を事故でなくし、ひとり暮らしとなった母は気丈に頑張っていました。しかし、主イエスは母をあわれんでくださいました。

二〇〇八年、母に腹部大動脈瘤が発見されました。母は不安で、頭の手術をしてくださった先生に相談し、慈恵医大を受診しました。二〇一〇年十一月、再診で手術適応となり、我が家に長期滞在となりました。

すべてのことはあなたがたのためであり、それは恵みがあります多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現れるようになるからです。(2コリント 4・15)

と話しました。そして、私の後について声に出してイエス様に悔い改めのお祈りをしました。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」(ローマ 10・9・11)

その後母は、一度高知に帰りたいと言い、八月から高知市の老人ホームに入居しました。私も三週間に一回のペースで母の様子を見るために高知に通いました。毎回三泊四日、母の部屋で宿泊し、日曜日には高知集会での礼拝に母と一緒に集いました。母も兄弟姉妹たちのお交わりをとて喜んでいました。二〇一二年六月にホームの自室で尻もちをついて胸部圧迫骨折したため、市内

母と一緒に日曜日は横浜集会の礼拝へ、火曜日は吉祥寺の学び会へと行けるようになり、母も集会の兄弟姉妹たちのお交わりが嬉しそうでした。高知県東津野村(現在は津野町)でもたれた記念会や高知喜びの集いに母と一緒に集えたことも感謝でした。

年が明けて二〇一二年二月、母は慈恵医大で腹部大動脈瘤のステント術を受けました。退院して三日目の夜中に転倒し、右大腿骨頸部骨折となり救急で横浜労災病院に入院。人工骨頭置換術が施行されました。母は、以前のように歩けなくなったこともあり、弱められていきました。そして、二月六日に病院のロビーで母にみことばを読んでいると、急に、「クリスチャンになるにはどうしたらいいが？」と尋ねてきたのです。私は突然のことで驚きましたが、「主イエス様に、今まで自分勝手に生きてきてごめんなさい。私のわがままのために代わりに死んでくださったありがとうございます。これからよろしくお願いします、と祈ればいいのよ」

の病院に入院しました。この時は、強い痛みがあり、更に弱められて行きました。「今まで自分は悪いことはしていない。わがままじゃない」と言っていた母が、初めて自分をわがままだと認めて、声に出してイエス様にお祈りしました。主イエス様のあわれみに感謝しました。この時、今後のことを実家に住む姉夫婦と話し合いました。母は、私たち夫婦が良いと言ってくれるなら私たちが夫婦の近くに来たいと言い、姉夫婦も許してくれたので、十月末に我が家近くの老人保健施設に入居させて頂きました。家庭集会や年末の御代田喜びの集いにも導かれ、御霊の交わりの中に入れて頂いて感謝でした。

二〇一三年五月に肺炎で病院に入院しました。この頃から言葉数が減り、徐々に衰弱していく感じでした。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。(2コリント 4・16)



右端が道世さん、お孫さん、ご家族と

人生の戦いを主に導かれて

田盛 道世

このみことばの通り、母にとつて必要なものは賛美とみことばと祈りになりました。「お母さん、イエス様にお祈りするきね」と言うのと「うん」とうなずき、「みことば読むきね」と言うのと「うん」とうなずき、みことばを真剣に聞いていました。母は、日々の歌26番「小羊は勝利された」を歌うと、きりつとした目になり、うなずきながら聞いていました。

母が召される十日ほど前に、祈り会の姉妹がお交わりに来てくれました。日々の歌の174番、「人知れぬ重荷背負いて、荒れ果てた野をゆき、傷つき倒れるその時、主は抱きしめたもう。『泣けよ我が子よ、胸に抱かれて。あなたが歩いた苦しみ、私が知っている』と」の賛美を聞いていた母は、涙を流し、姉妹の祈りに「アーメン」と言ったそうです。

母のすべてをご存じで、滅びからのちに救い出してくださった主イエス様は、この世の苦しみから、重荷から、母を完全に解放してくださいました。六月十八日

の朝、救急搬送先の病院に駆け付けた私に、意識のない母を前にして、担当医師は「耳は聞こえていますから、何か声をかけてあげてください」と言ってくださいました。私は母の耳元で「お母さん。もういいよ。天国でイエス様が待つてゐるからね。安心して天国へ行つてね」と声をかけました。日々の歌を賛美し、詩篇23篇を読み、主イエス様に祈りました。ただ、ただ、感謝しかありませんでした。母が平安にイエス様のもとに召された姿を見て、私は心から羨ましく、私も早く天国に行つて主イエス様にお会いしたいと思いました。母は今、主イエス様のみもとで、満面の笑顔で主イエス様を賛美していることでしょう。私にはその姿しか浮かびません。

大須賀弘子（おおすか ひろこ）／一九五九年、岡村末花（おかむら まつか）の次女として生まれる。森小、土佐女子中・高校、国立高知病院附属看護学校卒。一九九二年結婚、夫・佳之（よしゆき）

主の御名を賛美致します。私は一九四四年（昭和十九年）、和歌山の南にある紀伊天満で四女二男の次女として誕生しました。おてんば娘でした。物心のついた三歳のころ、「なぜ人は死ななければならぬのか」と思い、死があるならこの世に生まれてこなければよかったのに、と思つたり、夜中に飛行機音が聞こえると不気味で、もし爆弾を落とされたら死ぬかもしれないと戦（おの）のいていました。小学二年生の時、やさしい祖父が亡くなり悲しい思いをしました。死の悩みは、夜静かに眠る時、しばしば起こり、ずっと続いてありました。でも昼間は、春の野山にわらびやイタドリをさがし、山に可憐に咲く笹百合のつぼみや花を見つけて取ってきたり、隣近所の子供たちと鬼ごっこや缶けりなどをしたり、また山に薪（たきぎ）を取りにいったりして、楽しく過ごしていました。

家の近くには、紀南教会の伝道所兼保育園があり、私は一二年ほど保育園に通っていました。五歳のころ、三女の妹が遠くの病院で股関節脱臼の手術を受ける

ことになり、私は母の実家、子どものいない伯父の家に預けられました。そのまま養女となるつもりでしたが、小学一年の運動会の中には、家族の元に舞い戻っていました。それから、姉に教会の日曜学校に連れてもらうようになりました。賛美歌を歌い、イエス様の生誕劇を見るなどして過ごしたクリスマスのにぎやかで楽しい思い出があります。教会に通いながら、「真に神様は存在するのだろうか？」という疑問を自分自身に投げかけていました。小学六年生のころ、「自分は不思議な不可解な者である。同じように、神様も不思議な不可解な方であるとすれば、『神様はいない』とは言えない」と悟りました。そして、「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです」というヨハネ伝14章6節のみことばが、私の中に入ってきました。この世の人は死んでいくので誰も頼りにならない。大事に守ってくれる一番力強い父親さえ、最終的には頼れない。イエス様だけが頼れるお方であると確信し、イエス様に頼ることにしました。子供のころ

は、自由に好きなことをし、わがままだったと思います。中学生になると学問が楽しくなり、心の奥底では立身出世を目指そうと思うようになりました。しかし高校生になると成績がふるわず、立身出世の夢をあきらめました。

尊敬する教会の牧師が、東京の町田市にある鶴川学院を紹介してくださったので、受洗して保育科に入学しました。小高い丘の上の林の中で、各地から来られた方々、東南アジアの方々も含めて五十名ほどで寮生活をし、食堂で同じ釜の飯を食べ、慣れない交わりに揉まれながら、支えられて楽しい二年間を過ごしました。

卒業後は、郷里で二年間保母として働き、学院で出会った主人と、卒業の二年後に結婚しました。主の導きであったと思います。結婚して、やる気満々で遠い南の石垣島にやってきましたが、ちっともわからない方言と生活習慣の違いの中で、思い通りにはいかないストレスを溜め、悪戦苦闘しました。二年間は保母の務めを果たし、その後は子育てに過ごしましたが、四十代で主人は農業にもど

り、野菜作りに励むことになりました。私も自動車を運転して小売店を隈なく廻って野菜を売り、農家の苦労を体験しながら学ぶことが多くありました。結婚後も日曜礼拝を守り、造り主を大切にするのを、私の生き方としていて、これだけはずっと続けることができました。しかし、いつも自分の考えを中心にしていましたので、教会生活でも自分が表に出て問題を起こすため、御霊の実を結ぶことがありませんでした。

家庭生活にもいつも不平不満を持っていました。子育ては、夫婦の間に一致がなく、はじめなものでした。子どものことでは、つらい苦しい日々を過ごしました。

一九九八年、石垣で初めてのキリスト集会が持たれ、誘いを受けました。金城姉妹宅で、ベック兄のお話を聞いた時、「聖書を読むのは将来の希望と平安を得るためです」という言葉に驚くと共に喜びが湧いてきました。そのようなことはそれまで聞いたことも考えたこともなかったからです。これをきっかけとしてキリスト集会に導かれ、

徐々に聖書が語ることに目が開かれるようになっていきました。それと共に私の罪がわかってきました。それまでの私は、自分さえよければいいという利己主義の者で、感謝のない不満だらけの者でありながら、真の神様を知っていると思っていた傲慢な者でした。今、イエス様の光に照らされる時、いつも自分が罪だらけであることを示されます。イエス様はこのような私の罪のために身代わりとなつて罰を受けてくださり、私のすべての罪を赦してくださっていますから感謝です。死んでよみがえられて、天に上り、今も生きて働いておられますから感謝です。聖霊を与えてくださいますから感謝です。

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によつて造られたの



前列、左から妻の篤子さん、俊明さん、後列、左から美登里さん、奈緒さん、俊佑さん

大いなる主のご愛に感謝

大庭 俊明

です。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。
(コロサイ 1:15-16)

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。
(エレミヤ 15:16)

これらのみことばを読んだり聞いたりして、私もみことばを楽しむことができるようになってきました。現在、私は主人と障害を持つ孫と三人で暮らしています。孫の名前は幸恵といい、父親が名付けました。幸恵は小眼球で目が見えず、鼻もなく、歯のかみ合わせが悪いため、四歳、八歳、十五歳と数年ごとに大きな手術を受け、つらい思いをして困難を乗り越えてきました。しかし、皆に愛され、支えられ、守られて、すくすく育ちました。これまでのことのすべては、イエス様から与えてくださったためぐみと感謝しています。

イエス様は、幸恵を通して私に多くのことを教えてくだ

さいました。幸恵が「ありがとうございます」といつも感謝し、「お願いします」と素直に言う姿を見て、へりくだることを改めて教えられました。幸恵は、「幸恵は…の担当です」と言うのですが、この言葉を通して、どんなものであってもイエス様に愛されている、一人ひとりはおどろきの木の枝のように役目がある、イエス様は皆がイエス様と結びついて元氣であることを望んでおられる、といったことを知らせられました。イエス様は愛に満ちておられます。再臨の時を覚えて待ち望みながら、日々の戦いと楽しみを受け取らせてください、主に従って前に向かって歩ませてください、耐えられないような苦痛から守ってください、これからもよろしく願います、と祈っております。

田盛道世(みちよ) 一九四四年生 和歌山県出身
新宮高等学校卒 鶴川学院保育科卒
夫・雄(かずお) 長男・信寿(のぶとし) 長女・喜美子(きみこ) 次女・枝美子(えみこ)

私がイエス様を信じたのは一九九〇年、受洗は一九九二年、信仰をいただいてから今年(二〇二三年)で二十三年になります。家族は家内と長男、長男の嫁と長女の五人で、それぞれが信仰をもっています。主が家族に深くかわつてくださり、共に喜べることは本当に感謝です。

家族の中で最初に救われたのは家内でした。私の救いは、ベックさんが来られる家庭集会への家内の送り迎えから始まりました。信仰をもった皆さんが最初によく言われることですが、「集会から戻ってくると喜ぶ顔になっていた」事実を集会から戻ってきた家内に見出しました。しかし私は、「あなたが信仰をもつて喜ぶのは大いに結構、でも私には関係のないこと」と言っていました。

送迎を繰り返す中で、一体どのような人たちの集まりなのか視(のぞ)いてみたいと思ったことから私の信仰がスタートしました。その頃は、聖書というもの

があることは知っていましたが、それがどのようなものであるのかはまったく知りませんでした。横浜集会に集っておられる兄弟が聖書をくださいましたが、最初は何も興味がなく、開きもせずに置いたままでした。しかしあるとき、くださったものを放っておくのはよくない、という思いが与えられ、開いてみたことを覚えています。

そして聖書を開いたとき、かつて祖母の他界に直面して自分が死んだらどうなるのかと強い恐怖感におびえたこと、そのことをいくら考えても何も分からず、それ以上考えることを避けてきたことなど、を思い出しました。

開いた聖書には、「神さまがことばですべてを創られ、七日目に休まれた」とありました。よくは分らなかったのですが、自分の知らないことが書かれていて、新鮮な思いを抱きました。また、詩篇の中に「主の大庭」とあり、私の名字と同じであったことで聖書に対

して親しみを覚え、少しずつ読むようになりました。考えるのを避けていた死についても「死は終わりではなく、主と共に永遠に生きる」との答えを見つけたとき、言い表せない安心感を得たことを覚えています。

私は兄が二人、姉が三人の末っ子として生まれました。中学生になったころ、母は私の出産時のことを話してくれました。当時は医療設備が整っておらず、助産婦さんが子を取上げるのが普通で、私は未熟児で生まれました。育つことはあるまいと、手当をせずにしばらく置いておかれたのですが、産後の母の体調を見に来た助産婦さんが、まだ呼吸をしている私を見て驚き、手当をした、とのことでした。

子どものころは気管支ぜんそくで体が非常に弱く、幼稚園に入るころまで入院を繰り返していました。呼吸停止も何回かあったと聞きました。病院の窓から、外で元気に動き廻っている人を見たとき、普通の生活ができる日が自分にもくるのだろうか子ども

ながらに思ったことを、昨日のことのように覚えていきます。

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。(イザヤ 49・15・16)

このみことばのとおり、主は、生まれたときから守ってください、深くかかわってくださいたことを覚え、主・イエス様のすばらしさを痛感しています。

両親はすでに他界しましたが、北九州市に長兄と三人の姉、もう一人の兄が神戸に住んでいますので、聖書や集会の本などを送り、また喜びの集いに誘ったりもしています。二〇〇九年八月に長男が御代田で結婚式を挙げたとき、私は兄や姉たちに出席してほしい

と伝えたものの、「皆、年を取っているし、遠距離だし、無理だろう」と心の中では思っていました。しかし、パーキンソン病を患っている三番目の姉夫婦が来て、メッセージを聞いてくれました。主のなさることは自分の思いをはるかに超えていることを改めて覚えました。主の約束は絶対ですから、約束を信頼してこまめに会いに行き、救いを祈り続けていきたいと思っています。

横浜から東村山へ引っ越したことを機に、二〇〇〇年三月から家庭集会を開いています。私たちの住むマンションには集会のご兄弟の知り合いの方も多く住んでおられるようです。福音を伝える場として用いられ、主がご栄光を表わしてくださいるように、また主が必要とされる限りは祈って続けていきたいと思っています。

今の住居は七百戸を超えるかなり大規模なマンションなのですが、二〇二年四月から二年間、持ち回りで行なわれている理事会の役員を祈りながら務めました。

役職選出は、例年通り「くじ引き」で決めることになりました。私は、日頃はくじ運の悪い者なのですが、このときは一番を当ててしまいました。初めての経験でしたし、役員は総入れ替えでしたから、最初は何も分かりませんでした。規模が大きいことから共用施設が多く、いろんな問題が発生します。住民の数も多く、いろんな考えをもった方がいます。また、初めての大規模修繕工事が行なわれていたこともあって、長として判断しなければならぬ場面も多くあり、何かと大変な二年でした。

私は、日頃から口の重い者で、人前に出ることを苦手とするのですが、理事会にはいろんな方面で専門的な知識をもった方が備えられていました。住民の方と面談をするとき、会を進め、またまとめるとき、揭示物・議事録等の文章を考えるとときなど、すべてのことを通して主が支えてくださっていることを経験しました。

住民総会も、通常は長い時間がかかるのですが、驚くほど短い時間で終えることができたことも、主のなさったことで完璧でした。主の約束、すばらしさを体験することができたと共に、信頼して委ねることの大切さを身をもって学んだ二年でした。

任期が終わるときには、主・イエスキリストを信じる者であることを皆さんにお話しでき、定期的に家庭集会を開いていることもお伝えしました。知り合いになつた方々には家庭集会のお誘いもしています。期待をもつて祈っていきたいと思っています。

家庭では、毎日「日々の光」を読んで家族で祈りのときをもっています。主はみことばで日々導いてくださり、養ってくださいます。「みことばは生きている」ということを実感しています。「日々の光」のみことばは、日にちによって決まっていますが、共に交わり共に祈るときに、主はみことばで答えてくださいます。そのときどきに、ぴったりと当てはまる形で示してください

ます。そのことに恐ろしささえ覚えるほどです。

主は本当に偉大なお方であることを改めて覚え、感謝です。

イエス様がまた来てくださるときが近くなったと言われる今、しっかりと目を覚ましてそのときを待ちたいと思います。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。
(詩篇 119・105)

わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。

(詩篇 81・10)

大庭 俊明(おおば としあき)

一九五三年 福岡県北九州市若松区生まれ

全日本空輸(株)勤務

妻・篤子(あつこ)、長男・俊佑(しゅんすけ)、長男嫁・美登里(みどり)、長女・奈緒(なお)